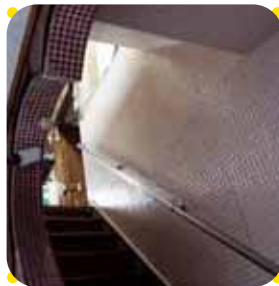
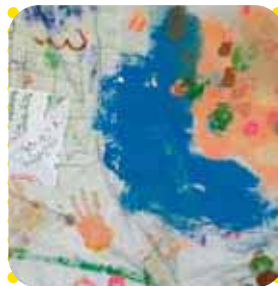


URP GCOE DOCUMENT 6

Arts Projects for Connecting Memory and Locality/Place
"COCORO-NO-TANE" Kamagasaki 2008



記憶と地域をつなぐアートプロジェクト
ころのたねとして釜ヶ崎 2008



URP GCOE DOCUMENT 6



Arts Projects for Connecting Memory and Locality/Place
"COCORO-NO-TANE" Kamagasaki 2008

記憶と地域をつなぐアートプロジェクト こころのたねとして 釜ヶ崎 2008

こころのたねとして 釜ヶ崎 2008

実施期間 2008年12月～2009年1月

企画・制作 NPO法人ココルーム

あしたの地図よ

実施期間 2008年5月～11月（全10回）

協力 カトリック大阪大司教区こどもの里

企画・制作 NPO法人ココルーム

はじめに	中川 眞	6
まだ明けきらぬ、たなびく雲の朝のはじまりに	ココルーム事務局	8
[こころのたねとして]		
作品集		12
SHINGO ☆西成、岩淵拓郎、岩橋由莉、上田假奈代、原口 剛		
プロジェクト解説	岩淵拓郎	32
[あしたの地図よ]		
ワークショップレポート	平川隆啓	34
プロジェクト解説	岩橋由莉	45
[論考]		
場所をプロジェクションする力	平川隆啓	48
「うんどろ」としてのココルーム	原口 剛	55
あとがきにかえて、歩きながら考える	上田假奈代	62



土のおいがした。男たちは働き、土を埋めた。





こどもたちの夢の^{しずく}雫は地図になる。



はじめに

中川 眞 大阪大学大学院文学研究科教授・GCOE研究推進担当者

都市研究プラザが担っているGCOE「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」においては、大学と市民との協働が、その活動の根幹をなしている。市民に向けて市民講座を開講したり、社会人の再教育を行ったりという、一方的な市民サービスによって地域貢献を唱える、従来型の協働ではなく、文字通りの協働、すなわち大学人と市民が混ざり合っただけで新たな知と社会のシステムを構築するのが狙いである。従って、知や経験のストックを大学という上流から社会という下流へ流すのとは全く逆の発想で、むしろ社会に教えを乞い、社会のなかから新たな学問の体系を構築して、大学へ環流するという方法なのである。そのような観点から、都市研究プラザは大阪市内の5ヶ所に現場プラザという拠点を設置し、そこで市民とともに試行を開始しているのである。

かつてE. サイドが知識人とは何かと問うたときに、プロフェッショナルリズムと対抗するアマチュアリズムに与することの重要性を述べている。彼によれば、アマチュアとは「専門家のように利益や褒賞によって動かされるのではなく、愛好精神と抑えがたい興味によって衝き動かされ、より大きな俯瞰図を手に入れたり、境界や障害を乗り越えて様々なつながりをつけたり、また、特定の分野にしばられずに専門職という制限から自由になって観念や価値を追究する」（『知識人とは何か』1994より）人々のことである。この痛烈な知識人批判は、大学人にも降りかかってくるといつてよい。そして、ここで称揚されているアマチュアの姿は、なんと魅力的であろうか。私はサイドの全思想に与するかといえば、必ずしもそうではないが、少なくとも、この文言とは大いに共鳴するところがある。そして都市研究プラザが市民との協働をいう場合、サイド的な反省の上に立っているといえるだろう。その協働のひとつの姿がNPOとの連動であり、現場プラザのひとつ、西成プラザでは、NPO ココロームが私たちのパートナーなのである。

ココロームは「アートによる包摂型就労支援」という成果を挙げて、フェスティバルゲートから釜ヶ崎と呼ばれる山王の現在地に引っ越した。「アートによる包摂型就労支援」と聞いて、どういうことが想像できるだろうか？ いったい、アートがハローワークの代替になるのであろうか？ しかし、実際にそういう時代が始まりつつあるのである。ニート、引きこもり、派遣勤務など、労働一般から疎外されがちな若者に必要なのは、仕事の斡旋に先立つ自己回復、自己表出能力のアップという過程である。アーティストがそこにかかわることにより、これまでにない自分と出会い、表現能力を磨き、世界に接する新しい眼差しを得る。そのような過程を一段ずつ経て、彼/彼女たちは社会との交わりを回復していくことができ、そこにアートの新しい役割があるというのである。

アートは従前と異なる空間、社会のあらゆる隙間を見つけて浸透しつつある。特筆すべきは、そういった場と遭遇することによって、アートそのものの表現手法など、コンテンツにも新しい形が生まれてくる点である。すなわち、アートは都合よく使い回されるだけではなく、新たな創造の契機にもなっている。それは、アートの投入される場が深刻な社会的問題の真っ只中ということも関係しているだろう。かかわる人々の切実で緊迫した思い、事情が堆積するなかからアートの「強度」は生まれ、新たな表現が誕生する。

本書のなかで示される作品群を、軽々しく「アート」と呼ぶにはためらいを感じるが、ここには、人と人が真正面から向き合い、真実を手繰り寄せるために信頼の糸を繕い合わせようとするところから生じる、奇跡的な瞬間が記録されている。ココルームの代表者である上田假奈代は、1990年代後半のある日、大学生から「ぼく、詩を仕事にしたいんです。どうしたらいいでしょう？」と質問をうけ、その不可能性を前に言葉をうしなつた。その2週間後に彼は自殺してしまう。しかも、報せを聞いたのが3ヶ月後のこと。彼女はショックを受け、半年くらい鬱々とそのことを考えたあげく、「人生をあきらめそうになっても、人生の小さな光になること」が詩の仕事であり、自分は一生この仕事をしようと腹をくくつたのである。その延長上の仕事として、この『こころのたねとして』はある。偶然の出会いを、必然の出会いに変える過程のなかにアートは宿る。というか、そういう事態をアートというのだろう。上述の「アートによる包摂型就労支援」も、ココルームを訪れる若者たちのお喋りのなかから気づき、問題提起として事業化したものである。まさにサイードの言う「アマチュアリズムを貫き、特定の分野にしばられずに専門職という制限から自由になって観念や価値を追究し」、同時代性を生き、未来を模索することを身上とするNPOである。

上田をはじめ、本書の執筆陣のなかの原口、平川各氏も都市研究プラザの研究員となった。市民との協働のひとつとしてのNPOココルームとの連携は始まったばかりである。私たちには協働の先行モデルはない。まさにいま、それをつくろうとしているのである。

すなわち、「たね」はもう蒔かれた。それをどう育てていくのか。大変重く、しかし面白いプロジェクトなのである。

空気がまだ攪拌されていない夜明け前。

あの日、ひんやりとした手触りで舞い散る木の葉のように「こころのたねとして」が現れてから、数年が経つ。

2003年、新世界フェスティバルゲートを拠点にアートNPOとして活動をはじめてから、なだらかではない大地を歩くような、めまぐるしく度重なる出来事に翻弄されながら、いつしか「場所の力」について考えるようになった。フェスティバルゲートは建設されて10年の間、テナントの退店が相次ぎ、持ち主は何度か入れ替わり場所の力を失い続けてきた。だからこそ、わたしたちはそこで活動することになったのだが。フェスティバルゲートが位置する新世界はまたたくまに観光地化していき、隣接する釜ヶ崎は日雇い労働者のまちとして社会と分断されてきた。

都市として紡がれてきた時間がいとも簡単に上書きされて、注意深く歩かなければ歴史の積み重ねをかいま見ることもできない。このふたつの地域だけではない。織りなされてきた現実を丹念に汲みとることなく、物語る者にこころ傾けることもなく、開発という名のもとに近代の日本は変化してきた。変化することはもちろん大切だが、いまこの瞬間は突然に存在するものではなく、わたしたちはつながりのなかに生きていて、そこに込められたものを大切にしていきたいと思う。そして、この場所に出会ったから、はじまる、ということもある。

わたしたちは、場所の力を失い続けるフェスティバルゲートで多くの時間を過ごした。日々を紡ぐこの仕事場で大阪の文化政策や地域の社会的課題に向き合うことによって、こころのたねを受け取っていたことに気づき、わたしたちなりのやり方でたねをてのひらに受け取り、あたため育て、渡していきたいと願ったのである。

アートNPOである、という軸足を持つことは多義の意味をもち、意味から逃れようとし、そして常に問われるものであった。大阪市の現代芸術創造事業という枠組みからスタートしたわたしたちは、公共性・公益性について考える。「公共性とアート」というとき、パブリックアートという概念があるが、都市を上書きするために彩られるアートよりも、その土地に根ざしているものに呼びかけ、現在に関与し、同時代を生きる人々とともに未来へ漕ぎだす創造をあきらめないこと、を身上とした。しかしながら、それはいわゆるアートの領域を拡張する、あるいは出ることもあった。新自由主義のなかで個人が分断されていくように、さまざまな諸活動もまた専門性のなかに閉じ込められてきた。それらを横断し、専門性が持っている「智」を社会に還元し、つないでいくことをわたしたちの仕事としたい、と考えるようになった。「うんどう」的態度をもったアート活動をいまだ名づけることがで

きていない。

2007年末にフェスティバルゲートから退去し、翌年1月に次なる拠点を釜ヶ崎と呼ばれる西成区山王の商店街においた。大阪市の事業をはずれ、一民間団体として市場へ出たが、アートNPOであることに変わりはなく、特異な地域での再スタートは試行錯誤の積み重ねとなった。動物園前一番街で開いた「インフォショップ・カフェ ココルーム」は、飲食店であり事務所でありオープンスペースでもある不思議な空間だ。この小さな場には労働者、野宿者、活動家、外国人、障がい者、若者、高齢者、ボランティアやインターンなど、さまざまな人たちが集い、トラブルは日常茶飯事にあり、ココルーム劇場としての機能は日々強化されている。釜ヶ崎夏祭や越冬活動への参加、地域の「こどもの里」へのアートワークショップの出前、諸団体との交流、大阪市立大学との協働がはじまり、地域内外のネットワークもひろがり、地域の高齢者の話を聴く機会も増え、「こころのたね」を育みはじめている。

08年初夏には第24次釜ヶ崎暴動が起こり、世間では大きく取り上げられることもなかったが、年末からの不況により釜ヶ崎への関心が高まっているように感じ、釜ヶ崎に蓄積された「智」を社会化していきたいと考える。それは封印されてきた釜ヶ崎に生きた人々の営みであり、排除されつづけてきた人々の人生であり、ゆるしつづけてきた人々のこころであり、小便くさい路地の片隅の腰掛け石のあたたかさであり、冬になればあちこちで焚かれるたき火の火の粉のように舞い散るものであろう。ささやかな活動であることは承知している。この場所ですなかりを紡ぎ、さらにこの曖昧な活動についての表現を重ね、「場所の力」を呼び起こし、ダイナミズムが起こることを願い、本書を作成する。

こころのたねとして

西成に生まれる
西成で暮らす
西成で働く
西成に生きてきた人々の記憶

どこにでもありそうで
ほかのどこでもない
西成という街の記憶

釜ヶ崎とよばれることもある

ひとりひとりの記憶の物語に
耳を澄ます

伝達されるために

ふたたび街へ還っていくために

この街の「場所の力」を呼びさます

ちいさく、ちからづよい「こころのたね」を
わたしたちは受け取り
そして、誰かに手渡していく

今、思えば…

SHINGO☆西成



「今、思えば…それでよかったかもしれないあ…」
幼い頃、家を転々とした。小学5年、12才で函館から東京。東京から埼玉県川越市と転々… そのために「ヤドカリ、ヤドカリ屋…」といじめられた。

その頃、飛行機の部品を作るための軍事工場で働いた。アルミと銅をリヤカーで集めた。一番、体がちいちゃかったから「チビ！チビ！」といわれた。でも、居心地は悪くなかった。飯場の女性は、ホンマ優しくしてくれたから… この時代、「女性」というだけで差別があり、かわいそうなところも見てきた。もちろん、子供にも容赦なかった。仕事をミスした時、「オイ、帰るか？オイ！」と言われたが帰らなかった…帰れな

かった…帰る場所がなかった… その当時の22～23才くらいの教官は、サーベルを腰からさげていたのを思い出す。

それから職を転々… 家も転々…
愛媛県で船の荷下ろしの仕事もした。給料はちゃんとくれるが、当時としては、ありえへんくらい高い値段、サバ缶などの缶詰を150円で売られた。でも、仕事するため、生きるために、それを買って喰うしかなかった… それだけやない… 茨城県筑波市の「アジアンコーヒー」でも働き、知多半島の原発二カ所の基礎づくりも、朝5時から夜遅くまで働いた。働いた分、よく使った… ホンマきれいに使った…



腕組みしながら、あさみさんは話し続けた…

ココ、西成に来たのは、昭和30年代。

当時、女性は今よりも少なかった。

昭和32年頃、売春禁止法の影響で飛田新地などは静かだった。宿は、西成の「わかまつ」や「ちとせ」で1泊70円くらい。昭和35年～46年頃、仕事手配師は、天王寺公園付近に多く、そこから仕事に行っていた。あいりん職安センターのまわりは、あまり目立つ物がなかった… 今と違って、仕事はなんぼでもあった…

でも、昔は組合とかないから、金問題は泣き寝入りするしかなかった…

そんな中でも、当時の楽しみは、休みの日に行く「づぼらや」。朝9時から開いてたなあ… 日当430円、

160円のでっちりと手ではじくパチンコ… それから西成三角公園まわりに多かったサイコロ博打451（しごいち）…

ココは住みやすいし、相性あってる… でも

「考えてみたら… 長生きしたなあ～」と一言。

いろんな場所、いろんな人を見てきたが、ボクの時代の日本の女性は、かわいそう… 利口な人が多かったのに、時代がそうじゃなかった。時代が受け入れなかった… もったいないなあ、ホンマに…

最近、ふと考えること… 「今の自分には何もない…

何も残ってないということ… 」でも、一生懸命、一生懸命働いたことを誇りに思う… あさみさんは、少しの沈黙の後、ゆっくり、やさしく、力強くこう話



してくれた…

「ボクは… 時代、時代に逆らわず生きてきた…

ないならないなりに生きていた…

1人が多かったなあ…

やりたかったことたくさんあったが、

今、思えば…

それで、よかったかもしれんなあ… 」と。

時々しか合わない、あさみさんの目は、

今の若者より先を見ている気がした…

今、思えば…



●聞きとられた人

浅見幹雄

1933年、アイヌに生まれる。少年時代にアイヌを離れ、渡り歩ながら、軍事工場や港湾などで働く。1958年、釜ヶ崎に来る。現在は、釜ヶ崎のまち再生フォーラムのまち歩きや勉強会、畑仕事などに参加する。

●聞きとった人

SHINGO ☆西成

Libra record / Libra West。昭和の香りが色濃く残る大阪の労働者の街「西成」育ち。1996年活動開始。生まれ育った「西成」の現実を冷静な視点と自らの体験を通して表現する独自の世界観は聴く者の耳を確実に捉える。2007年、自身初となる待望のファーストアルバム「Sprout」リリース。本作は日本唯一のHIPHOP専門誌 [THE SOURCE MAGAZINE JAPAN] では2007年のベストアーティスト部門一位に選出された。HIP HOPグループ、ウルトラナニワティック MC'Sでの活動も順調で、2008年4月にMSCのPRIMALと“鉄板BOYZ”なるユニットも結成し、混迷する飲食業界に熱々のコテを入れるべく SINGLE CD『鉄板BOYZ』をリリース。

現在はセカンドアルバム製作中。 <http://nishinari.exblog.jp/>

よくある話、

もしくはどこでもないここについて

岩淵拓郎

年が明けて最初の日の夜、道で暮らす男は、通りすがりの男から1枚の1万円札を受け取った。道で暮らす男は1万円札を長らく目にしていなかったもので、とても驚いて、それを握りしめたまましばしその使い道を考えた。そして夜が明けて、道で暮らす男は酒とタバコと食料を買って、同じく道で暮らす男たちと分け合った。そしてほんの少し残った小銭で自分の衣服を洗濯した。「いいことがあった」年が明けて5日目の日の夜、こんな話を道で暮らす男はとても嬉しそうに話した。すでに手もとには幾分の小銭も残っていなかったが、それでも道で暮らす男はとても嬉しそうだった。



1936年、マドリード生まれ。ごく普通の一般的な家庭で育った。銀行員の父と専業主婦の母。6人の兄弟、その一人は私がまだ赤ん坊のときに亡くなった。修道院に入ったのは16歳の時。理由を説明するのは難しいが、ただそういう生き方に大きな意味があると思っていた、惹かれていた。そして原爆投下直後の広島で活動していた神父の話聞いて、日本へ行くことを希望した。直感と衝動。行った後のことなんてわからない。楽観的とかそういうことではなく、考えない。とにかく行く。ただそれだけ。22歳の時、中国とは違う国だというくらいの認識で日本にやってきた。最初に目にしたのはどこまでもどこまでも続く家々の風景。この国にはたくさんの人がいるんだということを知った。







箕面、高松、洲本……いろんな街を転々とした。どこに行ってもいろんな風習や、文化や、規則があった。それらの中には受け入れにくいものもあったが、そんなことは大した問題じゃなかった。私は私以外の何者でもないし、適応しなければ生きていけないなんてそんなこともない。ただ、それでも最初は自分からいろんなことに合わせようとしていた。ある時は帰化しようと思ったこともあった。そんな考えはすぐになくなったが、それでも窮屈な思いはそれなりにしてきた。だから最初に釜ヶ崎に来た時は嬉しかった。その頃からこの街の人たちは、飾らず、そしてありのままだった。

夜回りををはじめとするいろんな活動を通して、多く人たちからたくさんのことを教わった。さっきの1万円もらった人の話もそう。彼らは社会から除外され、悲しみや苦しみが何であるかをよく知っている。だから他人の悲しみや苦しみも理解で

きる。分けあうこと、大切にしようこと。そして生きようとする。それはすべて聖書の教えそのもので、この街にはそれが現実のものとして存在している。頭の中だけで完結していた信仰は180度ひっくり返された。そしてすべてを突き動かした。

つい先日もこんなことがあった。食料を配りながら街を回っていると、リアカーを停めてその上で寝ている人がいた。私はその人を起こさないようにそっとおにぎり置いて立ち去った。しばらくして同じ場所を通りかかった時、その人は目を覚ましていたので、さっきここにおにぎりを置いたことを伝えると、そんなものはなかったと答えた。だから、次に配る時には見えないように隠しておくと言ったら、その人は私の顔をじっと見てこう言った。「何でそんなことなのか？ たまたま通りかかった人がお腹がすいていた。だから食べた。それでいいじゃないか」完全に私の負けだった。この瞬間、

その人は確かに生きていた。

貧困、酒、犯罪、野宿、日雇い労働……分かりやすい言葉とイメージで釜ヶ崎は語られる。しかしここに生きる人たちはそんなこととは無関係にこの瞬間も生きようとしている。ただ、だからといって全てが美化されるわけではない。この街が置かれている状況をどうして許せるだろう。変えなければいけない。戦わなければいけない。夜回りが決して解決になるとは思ってはいない。行政にできることをやれとみんなと行って文句を言う。今でも時々、嬉しい気持ちと怒りの気持ちが混ざってぐちゃぐちゃになることがある。

20年前のこの街はとても賑やかだった。毎朝たくさんの人たちが仕事に出かけ、たくさんの人たちが仕事から帰ってきた。街が動いていた。そういう雰囲気がどこにも溢れていた。今は仕事も減って、高齢化も進んだ。活気が感じられない。釜ヶ崎がではなく、労働者の街が変わったのだとを感じる。しかしだからといって私がすることが変わるわけではない。たくさんの人たちと出会い、分けあい、大切にしたい。私もまた、生きようとしている。私がここにいるということも、わたしが信じているということも、それは疑いようのない事実だからだ。

翌日、道で暮らす男は自転車の防犯番号が未登録という理由で警察に連れて行かれた。書類に名前を書き、警官の事務的な処理が終わるのを待っていると、突然何年も会っていない母親から自分の搜索願が出ていることを知らされた。警察の電話を借りて十数年ぶりに母親と連絡をとった。母親は最初その電話が自分の息子からであることを信じなかったが、最終的にそれが間違いなくそうであることを確認した。道で暮らす男も、その母親も、とても嬉しかった。年が明けて6日目の日。「今日もいいことがあった」道で暮らす男はまたいつか連絡をとってみたいと言った。



●聞きとられた人
マリア・コラレス

1936年、スペインに生まれる。敬虔なキリスト教徒の家庭で育ち、少女時代に修道院に入る。20歳でシスター、23歳で来日し、布教活動をする。現在は、釜ヶ崎で夜回りなどをしながら野宿者とかわる。聖母被昇天修道会シスター。

●聞きとった人
岩淵拓郎

美術家／執筆・編集者。兵庫県生まれ。関西を中心に言葉とその意味をモチーフとした作品を発表。同時に雑誌・新聞などでの執筆と編集に関する業務を行う。またウェブやメールマガジン、ポッドキャスト、ミニFMなどパーソナルメディアによる情報発信の実験と実践を継続的に行なっている。04年～、大阪市南森町のクリエイター自主運営のワークスペース「208」主催。2007年「こころのたねとして～＜伝達科学＞記憶の手順としてのドラマリーディング、もしくは路面電車跡」プロジェクトディレクター。

わたしはめぐまれている・小林淑子さんの物語

岩橋由莉



人は自分の物語をつむいで生きている。人の表現に関わる仕事をしている私は常々そう思っている。同じ事実でも、運がいいと捉えたり、運が悪くなったり。人がそれぞれ持つ人生の物語は、様々に変化をする可能性を持っている。私の仕事は、その人が持っている物語を、イメージや言葉、身体で表現し、改めて眺め直すお手伝いをする事だ。もちろん聴き手である私も物語を持っている。私（和歌山市在住40歳）岩橋がこの街と関わるようになって5年目。初めて足を踏み入れた西成警察署の周辺は最初、とてもショッキングな光景だった。路上に寝ている人、歩いている人たちの風貌、泥酔した人、様々な臭い。反対側にはスパワールドがあり、動物園もあるというのにこの光景は現代なのだろうか。西成を歩くと日本の昔の顔、裏の顔をの

ぞいているような気分になる。今回、西成という場所に関わって数年の私が50年以上住んでいる相手の物語とどう関われるのだろうか。小林淑子さんは現在78歳。隣の部屋には息子さんである高尾忠英さん（49歳）。二人暮らしである。小林さんの日課は朝、整骨院へ行き、屋前に飛田商店街の中のうどん屋さんでゆう麺を食べ、買い物して帰ること。いつも手押し車を引いてゆっくり歩いている。小林さんは股関節が悪い。最初の出会いは行きつけのうどん屋さんでお話を伺うところからだった。メンバーは小林さん、息子の高尾さん、記録の平川さん、そして、私。高尾さんは現在無職、そして障害を持っ

ている。「僕な、言語障害と知的な障害持ってるねん」ここが（頭をさして）アホやねん」「この子、自転車、壊れてんのにまだ乗ろうとする。ハンドルが曲がってて、いつか怪我する。なんとかいうてやって。事故する。危ない、ってわたしは何度言ってもきかんのやから」平川さんに一生懸命訴える小林さん。それに飄々と答える高尾さん。丁々発止、まるで夫婦漫談を聴いているよう。不思議なことにどんなに互いに不満を述べようとも、どれだけ相手のことを想っているかという告白に聞こえる。その間も高尾さんは、母親と我々のために、席を何度も立ってこまめにお茶を入れ換えてくれる。小林さんは我々に店のうどんやジュースをふるまってくれる。二人とも人

に対しての気の使い方がとても細やかで似ている。

小林淑子さんは島根県で、7人兄弟の次女として生まれる。昭和34年。29歳の時、島根で結婚を機に大阪、西成へ夫婦で出てくる。翌年、長男の高尾さんが生まれる。

しかし、離婚。

天下茶屋で7年働いたが、昭和42年から平成16年まで天王寺にある一つのホテルで、清掃婦として働いた。定年を迎えた以降も会社に呼ばれ続け、パートとして、そのホテルが閉館するまで勤め上げた。69歳まで働く。

二度目は小林さんのお部屋でお話を伺う。

三味線になった猫を供養する神社、暴力団の事務所。小林さんの住んでいるアパートはその中にある。似たような建物が密集して立ち並んでいる。もとはタイル屋さんだったというそのアパートは1階で靴を脱ぎ、タイルで飾られた階段を上がる。薄暗い廊下の両側に三畳一間の部屋が並ぶ。キッチントイレは共同。小林さんのお部屋はあらゆるものがところ狭しと積まれている。隅にある小さなテレビがずっとついていて、畳は目が分からないくらい擦り切れている。壁にはホテル在職中にもらった小林幸子のサインが飾られ、反対側には洋服や、日用品がかけられている。そして、いつもの自分の定位置に座る小林さん。高尾さんが小学校3年生の頃からずっとここで暮らしている。

宝物を見せてください、と前回お願いしていたところ、一冊の写真集を用意してくれていた。立ち上げから閉鎖されるまで勤め上げたホテルの歴史が刻まれたものだが、小林さん



にはわざわざ名指して送られたそうだ。「なんにもないけど、これはわたしが30年以上勤め上げた記念にといって会社からくれたもんよ。これは周りの清掃の人は誰も持っていない。わたしだけにくれたんよ。宝物といえぱこれくらいやねえ」
写真集には小林さんの顔は写っていない。
しかし、曲がってしまった指で写真集をいとおしそうになでる小林さん。

小林さんは実家に頼ることなく、この土地で高尾さんを養い、育て上げてきた。
その間、別れただんなさんがけんかをして人に怪我をさせたこともあった。だんなさんが入院している中、弁護士を雇い、裁判所まで一人で行ったそうだ。そのことで実家までお金をとりたてにこられたこともあるという。また、高尾さんがまだ小さい頃、近くに住んでいる人の車のアンテナを折ってしまった事があった。その時は、いくばくかのお金を包んで許してもらったが、後日、同じ人が、それでは足りない、家まで訪ねてくる
「でも、こっちもお金ないものねえ……。渡したいけど、ないのよ。正直にそう言ったらその人もこの部屋を見てだまって帰って行ったわ」
けらけらと笑う。

女一人でこわくなかったですか？子どもを抱えてしんどくなかったですか？

とても聞きたかった質問だ。
小林さんがこのアパートで高尾さんと二人暮らしを始めたのは三十代半ば。女一人で、この場所で子どもを育て、不安や迷いがなかったのだろうか。

生き方を自由に選んできたはずの私

はあふれんばかりの情報の中でいつでも揺れている。どっぷり迷っている。安定していない職。老いてきた両親。未婚である自分。これからの私の人生……。

「こわくなかないよ
わたしはね、会社に恵まれた。
周りの人間に本当に助けられて生きてきた
わたしはね、ものすごく幸せな人生を送らせてもらったよ」

小林のさんの口から二言目に出るのは「自分は恵まれていた。自分は幸せだ」という言葉と、くったくのない笑顔

「島根に帰るつもりなんかなかったよ。帰ったとしても正月くらいやね。この子がこんなや(障害がある)から、帰っても迷惑かかるでしょ。そのてん、ここはいいよ、だれもなんにも言わん。
もうそれが最高。
だからわたしはずっとここ」

「人は人。わたしはわたし。人生で大切なのはへんにさからわないこと。
素直に生きること。
これはお母さんから教えてもらった
お母さんからは人付き合いの心ももらった」

「みんなに引越ししなさいといわれたけど、わたしはここが大好き
他へ行こうと思ったこともない。
この場所、人との付き合い方が分かればなにより住みやすい。毎日行くところは決まってる。それ以外は行きたいとも思わない。
西成のこのあたりで私は充分。

でも、……
この子が普通の子やったら出てるかもわからんけどな……」

小林さんにお話作りをしてもらえないかと数点写真を持っていく。これは私のワークショップの中でストーリーを作ってもらおうというときに使う写真だ。
小林さんに気に入った一枚を選んでもらい、そのストーリーを作ってもらおうと思ったのだ
彼女はどんな物語をつくるのだろうか

何枚か興味深そうに見た後、小林さんは広い草原の中で年老いた男女が前方を指差している写真を選ぶ。
写っている二人の男女の顔はほとんどわからないくらい小さい

「この人らは夫婦やね
散歩に出かけとるんかな。年とってこんなふうならいちばんええね。
そら、こんな人生やったらええな」

この先この夫婦に事件が起こるとしたら何がありそうですかね

「さてね、狼にでもであうやろか……。そやけど、このだんなさんがおくさんをかばうやろね。この奥さんは気が強そうだけど。だんなさんはやさしいからね。なんかわからんけど、そうやと思うわ
こんな生活がしたかったけど、そうはならへんかったな」

終わり際に高尾さんが席をはずす。その瞬間小林さんは私に告げた。
「あの子は1歳8ヶ月頃に三階から落ちた。それからああなつてもたんよ」
それきり高尾さんの小さい頃の話は

しなかった

帰り際、小林さんと記念写真を撮る。

「まあ、とにかくあんたもがんばんなさい」

とニカニカ笑って手を握られる。その手は曲がっていて、しわだらけで、かさかさしていた

アパートを出ると、路上ではどこかのおじさんがビニール袋をさげてよたよたと歩いている

それを追いこす数台の自転車。いずれもおじさんばかり

小林さんは、ここで一人で高尾さんを育て上げたんだ、と改めて思う。

「私はしあわせ」と言い切る小林さんに、自分が選んでこの土地を生き抜いてきたという意地を感じる

私が小林さんの年齢の頃には自分の人生をどんな顔して物語るのだろうか、と考えながら帰路に着く



●聞きとられた人

小林淑子

1932年、鳥取に生まれる。結婚を機に、大阪に来る。23歳のときに、息子を出産。天王寺のホテルで69歳まで働きぬく。現在は、障がい者の息子と二人で暮らす。

●聞きとった人

岩橋由莉

ドラマスペシャリスト、表現教育家。演劇的手法を用いてコミュニケーションを体験していく「ドラマ」をベースに「コミュニケーション・アート」としてプログラムを独自に開発する。劇団ひまわりや玉川大学など様々な機関での講師を経て現在は日本各地で、身体、声などを用いユニークで楽しい五感を使うワークショップを展開する。

おつかあとおつたときが しあわせやつたな

めぐまれた人生とは思えんな はは

生まれかわつたら：

もう七八やけん

そいだけや

わしの人生

おわり

島田東町 59 番地

いまそこに本所さんとおかあさんの暮らした家はないだろう
島田川のそばにある木造二階建て

福祉マンションフレンドに暮らす本所さんの部屋は三畳一間
紙芝居劇「むすび」の新しいメンバーだ

小柄なからだ

人なつこい笑顔で ときおり遠くをみる

アーモンドのような目の二重のまつげの陰に

おかあさんの姿がみえる

箒をもって 路地を掃除する母と子の背中に

しずかな帳がおりてくる

夕暮れ 影が闇にとけていく 風

川のおいが運ばれてくる

まつげをふせて 地面をみつめるふたりの

塵をあつめ

しあわせのかけらをあつめている島田東町 59 番地
の 記憶

しずかに しずかに 川の風が吹いている

島田東町 59 番地

上田假奈代

わしが都合悪いときの名前は本所裕康ひろやま
本名は博史ひろしやけどな

昭和五年四月七日 岡山駅の裏からちよつと行ったとこ

島田川の近く 岡山市島田東町 59 番地で生まれた

おとうさんは 小さいときに死んだ

おかあさんは 病気で死んだ

あんまし広くない道に面した家は

玄関があつて 三畳のだいどころがあつて

板の間の六畳の部屋があつて 二階があつた

町内を母と二人で掃除して すこしだけお金もろうて

暮らしてた島田東町 59 番地

おにごっこ かくれんぼ たこあげ

はごいた 独楽あそび びーだま べつたん (宮本武蔵、桃太郎) 竹馬

少年の義勇軍にはいった

一六歳のとき戦争がおわつた

終戦のとき みんな泣いてはつた

進駐軍があがつてきて

女の人はかたまつておれ とか

男の人は殺されるから隠れる とかいうとつたわ

実際はそんなことないわ

進駐軍にガムやチョコレートもらいにいったわ

二〇か二一のとき 家出て あちこち飯場いった

東京 名古屋 大阪

土方や建具屋 センターからも仕事いった

いろいろ仕事したけど ぜんぶ忘れた

働いて 飯たべててん

難波うろうろして乞食みたいなことして

ほんで ここへ連れてきてもろて 七年になるねん





●聞きとられた人

本所博史

1930年、岡山に生まれる。大阪に来て、多くの飯場で働く。現在は、釜ヶ崎の福祉マンションで生活し、紙芝居劇むすびにも参加。

●聞きとった人

上田假奈代

NPO法人ココルーム代表、詩人、大阪市立大学都市研究プラザ研究員。1969年生まれ。3歳より詩作、17歳から朗読をはじめ。1992年から全国各地でさまざまな人を対象に詩のワークショップや朗読活動を展開する。2003年新世界フェスティバルゲートでココルームをたちあげ「表現、自立、仕事、社会」をテーマに、分野を横断し社会的な問題にも取り組む。2008年1月から西成区山王でインフォショップ・カフェココルームを運営。

<http://booksarch.exblog.jp/>

証書卒業

原口剛



生まれ育ったのは愛媛の山奥。少年時代は、あんまり好きじゃあないんだ。

でもまあ、高校は行ったんだよ、とにかくね。兄姉も行ってることだし、高校ぐらいは行くもんだ、っていう感じだよ。山奥の高校に通ったけど、高校出て何をやるかなんて考えてないから。どうせ自衛隊でも行こうかってんでね。だいたい出来が悪いのは自衛隊か警察官ぐらいやったからね。自衛隊のほうがいいんだよ。警察は親も嫌ってたからね、なんか知らんけど。

そんなことでブラブラしとって、三年になってからかな、姉が「大学でも行ったら？」なんて言うからね。大学！？そんなのはまず頭の中にあるわけないわけじゃない。何のことを話してるのかわからなかったよ？

ただ、確かに振り返ってみると、いちど聞いたことはあったんだよ、「大学」って言葉。小学六年生のときだった。先生がね、ちらっとそんなこと言うててね。

でもそれまでは、ほら、自分には関係なかったから、「大学」なんて言葉。ぜんぜん世界が違うもんだと思ってたよ。高校三年のときに姉から「大学」って言葉を聞いて、「あ、そういうのもあるか」って思って。それで、初めて図書室に行ったんだよ。図書室なんてね、それまでぜんぜん縁がなかったの。行って調べたらびっくりしたよ。「なんと！世の中にこんなに大学あるんか」って、初めて知ってね。

そこからだよ、さあ困った。いまさら勉強しても間に合わない。まず、

試験に算数と英語がないところから調べるわな。そしたら、都会に出るしかないじゃない。ほんとはね、大阪だけは行きたくなかったんだ。地方からみたら大阪っていえば、泥臭いというかなんというか、悪いイメージしかないから。かといって東京行くには金がかかりすぎちゃうしね、どうしても大阪止まりなんかなあ、と思って。

先生に「大学いきますわ」って言ったら、「おまえ大学いっても勉強せんやろ」、それだけ。「そんなことありません、勉強します」なんてことは言ったけど、まあ、推薦入試で受かったから、あとは勉強しないよね。

大学には入ったけれど、まあええか、これも社会勉強や、て感じやったな。ところが実際に行ってみたら、これ

がとんでもねえ、高校よりもひでえ大学だったんだ。蓋をあけてみたら、体育会系というか、右翼だらけの学校だったんだよね、俺が入った大学は。体育会系の世界はもう卒業したかったんだけど、ほら、田舎から出てきて目つきも悪いじゃない？無理やり体育会系のクラブに引っ張り込まれてね。

ヤクザ的世界そのものだったよ。たとえば、野暮な先輩が「おい、カラスは何色や」って言う。「黒です」って答えてみなよ、「カラスは白色や」と、どつきまわされるわけ。それからまた、イライラしながら上のヤツが「カラスは何色や」って聞く。こんどは「白」って答えるよね。そうしたらこんどは「カラスがなんで白なんじゃ、コラ」って、またどつきまわされる。正しかろうが正しくなからうが、上の言うこと

は絶対命令服従。そんな理不尽な、暴力まみれの世界に住まわされようとした。

講義は講義で、ひどいもんだったよ。どっかの公立大学を定年退職した教官が使いまわしの講義を、ただダラダラとやるだけ。教授なんかも、学生なんか信用してないから。「お前らみたいなバカな学生」、そんな感じやったから。そんな講義なんかには、ほとんど顔出してないけどね。

とにかく体育会の世界から逃げ出したかったんだ。そのとき相談に乗ってくれたのが、沖縄の人やった。かなり歳くったイメージでね、髭が濃くてね。「俺がなんとかしてやろう」ってことで、その先輩のクラブに移ったんだよ、グリークラブ。「グリークラブってなんですか」って聞いたら、

男性合唱団だったんだよね。

その沖縄の先輩。おっちょこちょいなんだけど非常に情熱的な人でね。振り返ってみると、俺もずいぶん感化されたんだろうなあと思うよ。革命がどうのこのつて、いつも話してたよね。でもちょっと浮ついた、チャラチャラした感じがあってね。こういう男は論破せんとあかん！と、なんでかな。そう思ってね、その先輩の部屋に行った。そうしたらそこには、わけのわからん本がいっぱいあって。

そのなかに、革命がどうのこのみみたいな本があったもんだから。これか！ということで、『国家と革命』を手にとって。読んでみたら、国家とはなにかとか、そういうことをはっきりした体系で書いてあって。最初は四苦八苦して読んでただけ。5、6回も読んでいるうちに、なるほどこういう仕組みだったのか、って、世界が見えてきたりしてね。

67年、いやそれ以前からか、その大学の民主化闘争があったみたいなんだけれど。68年ぐらいのときに、体育会系がどーんと出張って、徹底的に潰されたんだよ。だから闘争が全国的に盛り上がっているときにはもう、うちの大学は暗黒の時代に入っていて、俺らは69年にぼこっと入ってきたんだよね。学内は体育会系に仕切られちゃって、先輩連中は身動きとれない状態だった。民主主義なんか存在しない大学。

そんななかでもグリークラブは一定自由に討論できる場所だったわけだけど。ところがね、何を言っても暴力問題を切り離しちゃうんだよね。この感覚が最初、分からなく



てね。いわゆるまあ、それが民主主義だったのかもしれないけど、あんまり民主主義とは縁のない世界で俺はずっと育ったからね。討論はできる、でもね。なにかやろうとしたら体育会系の暴力でつぶされちゃうわけでしょ。だから、それに対抗できるような質というかね、内容を持たんとあかんかった。理屈もあるだろうけど、それを越えたところの質を持たない限りは、生息することさえできない。対抗できないと、やりあつていけないと、大学生生活もまっとうに送れなかったわけだよ。

俺自身は、大学を民主化しようとかそういう感覚はまったくなかった。けど、俺もみんなも抑圧され続けてきたからね。学生を学生とも思わないような、けったくそ悪い教授に一泡ふかせてやらんとあかん。そう思ってた。大学も大学やからね、それでぼろ儲けてたわけやから。これを出ていくのはけったくそ悪くてね。で、やっちゃった。2週間前に、みんなで腹くくって。

それをやるってということで、まずは文化委員会の選挙に出て、委員長になって。それでもって、「ここは金なんぼある？」って聞いたら金欠だったんだよ、誰が使こうたんかわからんけどな。ちょうどそのとき、学費が送られてきた。そんなもん払ってもしゃあない、よしこれを使おう、ってんでね。それから、材料仕込みに行つて。レンタカー借りて、運動で付き合いのあつた連中のおる大学にドーンと行ってね。ちょっと資材横流しせえって、鉄パイプからなにかから、全部積んで、材料を一定程度調達してね。

俺は農民の子で、子どものときに、そら、野山をかけずりまわつて、竹やりをつくつたり、チャンバラごっこで武器をつくつたりしてるわけだから。いろいろとね、糸鋸買わせにいつて、資材の先をとがらせて。

しよせんそんなことやつても変わらんやんか、なんて言う先輩連中も、うだうだおつたよ。彼らは日ごろから、「どうせお前らバカな奴」って言われて萎縮してるからね、斜めになつちやつて、卑屈になつてたんだよ。それでいつもなんにもできずにいたわけやから、先輩連中を「やかましい！俺はやるんや」って、まずはとちめてね。やるって言つても、責任は俺がとるわけでしょ。だから、「文句があるならかかつて来い！」って言つてやな。



その先輩連中をとちめてからは、ガラッと変わった。全体が動き出したんだよ。もう、「やるんだ！」ってことで、ほつといつてもぶわーつていろんな人が動くんだな。俺なんか、さあこれからどうしようかって必死で策を練つてるときに、そのへんはすごいよなあ、乗つかつて、先に行つちゃうんだよ。誰か知らんけど、ラムネつくつて運動場で実験した奴もおつたね。ものすごい音がするわけだよ。ドッカーンって。ムワってしてな、いやーなにおいがするわな。そしたらね、体育会系の奴がびっくりするわけだよ。「こいつらほんまにやる気や」ってんでね。

いろんな奴が乗つかつて動いていく、それはいいんだけど、俺としてはどう実行するか、つていうところが問われるわけでしょ。初めてのことで、未経験だしね、誰も教えてくれねえんだから。とにかく、俺の任務としては、どうやってここの学生を、やな、その、ずぶずぶの欲求を立ち上がらすかがポイントなわけだ。そうやって立ち上がらせるんだけど、一方ではとぼけた連中がいろんなモン投げて実験したりするし、みんな好き勝手なことをやりはじめるわな。

それでも、一応手続きは踏まんとあかん、つてことでね、全学集会を開いて、スト権確立してからやろうということ。そこには体育系の奴もここぞとばかりに全部来るわけだから、こつちも構えてね。やるときはやるんだ、つて。押し切つて、スト権確立させて。

71年。大学本館をバリケード封鎖したんだよ。何日ぐらい封鎖したかな、



3、4日かな、2、3日かな、忘れちゃったけど。機動隊とのがちんこの攻防戦をやった。それで、まあ、バクられて、拘置所入って、数ヶ月後には保釈されるんだけどね。大学からは、謝罪したら停学ぐらいで済ますという話はあったんだけど、「なんで頭下げなあかんねん」って言ってやな。

とにかく、大衆はいかにして立ち上がるのか、っていうのを見たかったんだ。どうやって統制ひくか、どうやって抑えるかも含めて、その時点で何をすべきかも含めて、やな。それを、身をもって自分で学習したからね。まあ、それが卒業証書だなあって、思ってた。それが、卒業証書だよな。

大学にはもう来てくれるな、ていうことで、処分になったよ。でも、それは名誉だから、卒業証書なんだから。俺としては、「ありがとう」という

かたちでね、大学を去ったよ。最後にいっぺん、ボックスの荷物を取りに行ったんだ。民族派の連中が取り囲むボックスに行ってね。「こいつやっぱり来よったわ、来てもらっちゃ困るんや」って言われたけれど、「いや、荷物取りに来ただけや」、そう答えた。そのときは、これ、なんかされるのかなあと思ったけど、手は出してこないんだよね。向こうもやることをやりきった奴に対しては、敬意を払うもんなんやな。

大学から持って帰ってきたロッカーがあってね、ひとつ。ずうっと持っていたやつなんだ。ちっちゃなロッカーでね、レーニンとマルクスの写真が貼ってあって。火事にあっても、なんかしらん、そのロッカーだけ焼けなかったからね。転々と持ち歩いて。今でもあるよ、向こうの組合事務所。あそこに置いてあるよ。

●聞きとられた人

山田 實

1951年生まれ 1973年より釜ヶ崎にて日雇労働者として生活し、釜ヶ崎日雇労働者・野宿生活者等の生活・労働環境の改善に取り組んできた。2000年よりNPO法人釜ヶ崎支援機構理事長。

●聞きとった人

原口 剛

大阪市立大学都市研究プラザ/地理学、日本学術振興会特別研究員・神戸大学。1976年千葉県生まれ、鹿児島育ち。2000年に大阪に移住して以降、釜ヶ崎の戦後史や野宿者の現状、都市論や社会・空間的排除論などについて研究をしている。2007年、大阪市立大学文学研究科博士課程修了、博士(文学)。論文に『「寄せ場」の生産過程における場所の構築と制度的実践』人文地理 55 (2) ,pp.121-143, 2003 など。

表現と伝達の営みとしての「こころのたねとして」

岩淵拓郎

自分ではない誰かの記憶を聞き取り、それを元にして伝達のための表現作品を制作、発表する。「こころのたねとして」はそうした一連の手順＝メソッドの呼び名です。この手順は、その他の多くの開かれた手順がそうであるように（たとえば料理のレシピがそうであるように）、目的や状況にあわせて誰もが自由に用いることができます。

「こころのたねとして」は2007年にココルームが中心となって企画した同名のアートプロジェクトから生まれました。当時ココルームはまだかろうじて営業中だった複合娯楽施設フェスティバルゲートの中にあつて、新世界や西成など周辺地域との関わりの中でアートが果たすべき役割について模索・実践していました。その内容は就労支援からホームレス支援まで多岐にわたり、「こころのたねとして」はそれらの“集大成”的なものとして実施されましたが、実際そこには“集大成”と呼べるほどの具体的な手法やその有効性をしめす理論が用意されていたわけではありませんでした。関係者は度重なるミーティングやワークインプログレスを繰り返し、試行錯誤しながらプロジェクトそのものを作り上げていきました。そうして出来上がったのがメソッドとしての「こころのたねとして」であり、7人の表現者たちによって制作された7つのテキスト作品であり、『記憶の手順としてのドラマリーディング、もしくは路面電車跡』と題されたドラマリーディングライブでした。

この時私はプロジェクトディレクターで、ステージ上で7人がそれぞれに紡ぎだした記憶の物語を朗読する様子を客席後ろのブースから見ながら、このメソッドが秘めている可能性を感じました。それがどのようなものかはつきりとは分かりませんが、この方法でアートは人々の背後に流れる文脈、すなわち社会に対してより直接的に関与できるのではないかと、そんなことを漠然と考えていました。面白いことにスタッフや表現者の多くがこのドラマリーディングライブで同じような手応えをつかみ、それは結果的に翌年出版されたドキュメントブック『こころのたねとして — 記憶と社会をつなぐアートプロジェクト』制作へと繋がっていきました。同書では、いくつかの異なる分野からプロジェクトの検証が行われ、さらにハイデンの提唱する「場所の力」を借りて具体的な可能性についても示されています。

他者への聞き取りを通して作品制作を行うことは、表現の分野においても、またそれ以外の分野においても、それほど新しい手法ではありません。にもかかわらず「こころのたねとして」がひとつの確立したメソッドとして扱われなければならなかったのは、それが「表現」と「伝達」という2つの大きな問題に対峙するためのものであった点にあると考えています。少し乱暴なものの言いになりますが、「表現」は人が精神と向き合った時に対峙する問題であり、「伝達」は社会と向き合った時に対峙する問題です。この2つの問題は、それぞれの性質上、同じ次元で扱うことが困難とされてきましたが、実際のところ同じ人間がそれを行う以上表裏一体の関係にあり、しばしばその境界を越えてきました。ときに芸術はより精神的であるため社会性を帯び、ときに社会運動はより対外的であるために表現性を帯びてきたわけです。それはまさにココルームという、アートの文脈においても市民活動の文脈においても極めて微妙な活動が続けてきたグループが歩んできた道そのものであり、そこから生み出された「こころのたねとして」というメソッドそのものであると言えるのではないのでしょうか。

[プロフィールは19ページを参照]



あしたの地図よ

西成にある「こどもの里」に出かける

こどもの人たちの手指は
未来を描く
見たこともない昔の話をきいて
想像して描く

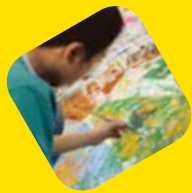


いまを描く



いちまいの地図はみんなでつくる

「こどもの里」にいるこども
頼もしいスタッフ
アーティスト
お手伝いの人
お喋りしながら きいていると
線にも絵にも物語があって
「あしたの地図」は紡がれる



5月30日(金)
『音に出す 体で歩く 言葉にする』

会場：こどもの里
時間：16:30～18:10
人数：児童14人 スタッフ7人
進行：岩橋由莉・小沼亮子・上田假奈代

日雇い労働者のための簡易宿所が建ち並ぶ地域がある。大阪市西成区、JR新今宮駅の南側に南海線と堺筋に挟まれた都市の一部、通称釜ヶ崎だ。数こそ少ないが、子どもたちもここで生活する。

西成警察署の高い塀をぐるりと囲むように、毎日、人びとが列をなす。その先には四角公園があり、炊き出しの白い煙が上がる。その光景を眼前に、こどもの里はある。子どもたちのはしゃぎ声が途切れることのない場所だ。

「ガニ!」「ジロー」「トシエ」。スタッフを呼ぶ子どもたちの声が飛び交う。幼稚園から小学生低学年ほどの子どもたちが、じゃれ合いながら遊んでいる。そこに見知らぬ大人たちが飛び込む。遊びとアートの出前教室が始まった。

「みんな、音楽で遊ぼう」。小沼さんは、かき集めたいろんな楽器と、4つのメニューを用意していた。まずはリズム遊び。次々と指名してい

く子どもたちが音をつなげていく。少し慣れてきたら、楽器で自己紹介。手にした楽器でとっておきの音を紹介する。今度は、楽器のかえっこ。リズムにのせて、楽器を回しながら、いろんな音を出す。その勢いで、最後にみんなで大きな音や小さな音を繰り返す。波打つ音の一体感に包まれた。

「こんにちは!」と大きな声が響く。バトンタッチした岩橋さんの進行で、体の動きを使った遊びが始まった。手始めに好きなところを歩いてみる。子どもたちがドタドタと歩き出した。体が温まると、歩き方に変化をつけてみる。「フラダンス歩き」「クロス歩き」「自分歩き」。次々とひねり出される歩き方。実験場のような光景が広がった。最後に5,6人のグループで、きめのポーズを取る。みんなでいつもと違う体の動きを楽しんだ。

「みんな集まって、言葉遊びをしよ」と上田さんが提案。手渡した紙とペンに、自分の好きな言葉を紙に3つ

書く。そこで、みんなの書いた紙を集めてシャッフル。他人が書いた言葉を前に、新たに感じた自分の言葉をのせる。体験を言葉にする楽しみを、みんなで分かち合う。

今回は、3人の大人がそれぞれの色を出したワークショップを実施。プログラムのレパートリーに広がりを持たせた。遊びの要素を取り入れつつ、子どもたちと作品づくりのワークショップを展開していく。子どもたちの記憶を膨らませ、引き出し、表現する試みである。

「子どもとの距離の取り方をもっと丁寧に」「障がいを持つ子どもの対応に躊躇があったのでは」。スタッフの振り返りでは、子どもと共同作業する難しさが噴出した。自分の表現に戸惑いがある子。喜怒哀楽を正面からぶつけてくる子。振り返りを通じ、今後のワークショップに工夫を加えていく。(平川)



6月12日(木)

『体の動き 分かち合う』

会場：こどもの里

時間：16:00～18:00

人数：児童15人 スタッフ10人

進行：岩橋由莉

3階建ての四角い建物。小さな玄関口の奥に、傷もぐれのフローリングが広がる。こどもの里に通うみんなの遊び場だ。子どもたちがドタドタと駆け寄り、「だれ～」と各々に叫ぶ。小学生を中心に、3歳児から、中学生、高校生、障がいを持つ青年など、幅広い子どもたちが集う。大阪市西成区菟之茶屋にある「こどもの里」で、ワークショップを利用した、子どもたちと「記憶」をたどる交流が始まった。

放課後、集まり始めた小学生らが、じゃれ合いながら遊んでいる。熱中しているところへ滑り込むように、名札づくりを始めた。ペンと紙を手渡すと、グループのようなものができ、それぞれ固まって名札をつくった。自分の名前を書いて、紙を思い思いの形に切る。それを胸に貼って、一人ひとりの自己紹介が始まる。お互い恥ずかしそうな空気に包まれていた。

今回のワークショップは、体を使

うことに慣れてもらう、そんな仕掛けを織り込んだ。進行役の岩橋さんが「なーべーなーべーそーこぬけー」と声を響かせる。二人組みになった子どもたちが、体をくねらせる。ペアは、次第に3人、5人と広がり、一つの大きな輪になる。

「次は、にんげん知恵の輪をしようか！」岩橋さんが新しい遊びを投げ掛ける。「じゃ、みんなそのまま手を離さずに」「その輪がぐねぐねになるよう、手と手の間をくぐったり、乗り越えたりしてみて」。一瞬、頭をかしげた子どもたちも、次第に動き出す。「そっち、そっち」と掛け声が大きな束になる。「ストップ！元の輪に戻ってみよう」。子どもたちは懸命に体をよじらせた。鳴り止まぬ合図が「あー」の一言に変わった瞬間、手が離れてゲームオーバー。この要領で、にんげん知恵の輪を続けた。

押し合いへし合いした後、思い出

をグループで演じることにチャレンジした。まずは話をする。男の子4人と女の子1人のグループから、「田植えで泥んこになった」と声が挙がった。「なんばパークス」「いっしょに行ったよ」グループ同士での声の掛け合いも始まった。グループごとに付き添う大人が、思い出を聞き取る。

思い出のキーワードが出てくると、どう演じるかを考える。女の子のグループはセリフと役を決めた。体いっぱい手を広げながら手話でやりとりするグループもあった。スタッフに甘える男の子のグループは、ほとんどブツケ本番だ。発表では、はにかみながらも、演じきった。思い出を数人で共有し、それを体で表現する。今回、子どもたちは少しずつ、その方法に慣れていった。

1ヶ月ぶりに訪れるこどもの里。今後、ほぼひと月ごとに子どもとワークショップを繰り返していく。(平川)



7月10日(木)

『演じてみる 楽しんでみる』

会場：こどもの里

時間：16:00～18:00

人数：児童 10人 スタッフ 10人

進行：岩橋由莉

「こんにちは」と叫ぶと、子どもたちが飛びついてきた。持ってきたペンやハサミや紙を広げ、まずは名札をつくる。2階にいる子どもや、学校帰りの小学生など、徐々に集まり始めた。慣れた手つきで名前が彩られていく。今回も、体を使うプログラムに挑戦する。

「みんな、立って！」進行役の岩橋さんの合図に、子どもたちが飛び上がった。「なにをするん？」の投げ掛けに、「今から、私が言うことと反対の動作をしてみよう」と答える。「じゃ、立ってみて」。数人、出遅れるものの、みんな座った。「歩いて」「止まって」「右手を挙げて」などの掛け声を重ねる。次第にみんなの動きが揃い始めた。

次も、合図を使った遊びを続ける。二人組になり、ひとりが合図を出し、もうひとりはそれに応じる。ただし、応じる方は目を閉じたまま。背中を

押し力を加減することで合図を送りつづける。背後に伝わる感触を頼りに、体を動かす。「わっ、大丈夫だよね」「あっ、目をあけちゃだめ」「ごめん、ぶつかった」。視覚をさえぎられた子どもたちは、恐る恐る動き出す。みんなが異なる動作で、ぎこちなく部屋中を歩き回った。その様子は、まるでアメーバー状態。予測不能な動きに、みんなで一喜一憂した。

みんなの動きが一層ごたごたしてくると、「今度は ねんど遊びをしようか」と岩橋さんの声が掛かった。ねんどは自分たちの体だ。体をこねこねして、やわらかくほぐし、形を整えていく。まずは二人組になって、簡単な丸や数字の7、アルファベットのLなどに挑戦。感覚がつかめてくると、花や魚など思いつくものを形にしていって、「3,4人のグループになって」。協力して、より大きく、より複雑なものをつくってみる。そ

して最後に、みんなで大きな木をつくったときには、みんな体をくねったり、大人の腕にぶら下がったりと、いろんなポーズをとることに夢中になっていた。

体の隅々まで動かした後は、グループで演劇を行う。突然「夜中の2時を演じるのってどう？」そんな投げ掛けに、「なんでー」「怖い話をして！」とすかさずカウンターが入る。何の脈絡もなさそうなテーマにも敏感に反応した。「よし！みんなで夜中の2時を一瞬のポーズであらわしてみよう」。人間ねんど遊びと同様、みんなの体を組み合わせ、ひとつのシーンを表現する。自信が付いてきた子どもたちは、とびきり怖い話や、不思議な夢の体験を披露した。新鮮な体の動きに触発された子どもたち。共同作業にも弾みがついてきた。

(平川)



8月28日(木)
『思い出 大きな地図に』

会場：こどもの里
時間：16:00～18:00
人数：児童13人 スタッフ8人
進行：岩橋由莉

「今日は何するの？」小麦色に焼けた肌の子どもたちが出迎えてくれる。夏休みの子どもたちが、遊びまわっていた。今日は持ち込む道具が、少々大掛かりだ。絵の具にブルーシート、筆、バケツ、大きな布に、新聞紙などである。大きな地図を描くための一式を携えて、夏の思い出の詰まった地図づくりに臨んだ。

子どもたちが飛びはねる傷もぐれの床の上に、ブルーシートと白い布を広げた。「はい、始まるから集まって」と叫ぶまで、子どもたちははしゃぎ続ける。何するのと好奇心に満ちた目を投げ掛ける子どもたちに、「みんなが乗っかっている白い大きな布に 絵を描きます」と進行役の岩橋さんが説明を始めた。まずは、みんなが夏の思い出に向けて出発する、“駅”を描く。ここから広がる余白に、思い出を載せていく。

駅から伸びる線路沿いに池ができた。「夏休みに行ったねん」。こどもの里で行ったキャンプの話がわっと盛り上がる。池の周りには、カブトムシやカエル、大きな木や川など、自然がどっと描かれた。

中学生の女の子は、遊具や木がたくさんある夏の公園を描いた。他の女の子や男の子によって、お化けがいっぱいの夜中の思い出も加えられた。他にも、太陽やヤシの木、花火など、布いっぱいに思い出が渦巻く。実体験だけではなく、こうなればいいなと浮かんでくる、未来の思い出も混在する地図となった。

そんな中、火事を描く子どもがいた。タケシ君(仮名)が、ひとり火事をもくもくと描き続ける。「この赤いのは何?」「火事、燃えている」「どうしたの?」「火事を見た」「どうだった」「真っ赤で熱そうだった」

「こわかった?」「心配だった、平和になってほしいな」。スタッフが付き添いながら、やりとりが進む。話を引き出すうちに、火事の光景は平和という希望にたどり着いた。子どもの状況に応じ、できるだけ丁寧に聞き取る。そこから表現の可能性を押し上げられればと、思いを注いだ。

出発地を手がかりに、無秩序に描き始めた地図が、その混沌さはそのままだに広がり始める。地図世界に、店、仕事、家、公園などの自分たちの居場所をつくりだしていく。数回のワークショップを通じ、お互いに持つものを表現したくなるような関係ができてきた。おぼろげながらも、思い出を絵だけでなく、ことばや、体の動きで表すことを楽しんでいる。そんな感触を得た。(平川)



9月11日(木)
『自分の分身 ごっこ遊びで』

会場：こどもの里
時間：16:00～18:00
人数：児童11人 スタッフ7人
進行：岩橋由莉

みんなが輪になって、「ハイ」の掛け声をまわす。つまづきながら、「ハイ、ハイ、ハイ」と声がぐるり一周する。今回は、輪になって掛け声を回すことからワークショップが始まった。

隣にハイと声を掛けて、掛けられた子どもは、そのまた隣にハイと声を掛ける。この流れで、回す速さを変えたり、方向を逆にしたり、リズムをつけたりして、遊ぶ。自己紹介に変わる、簡単な準備運動である。あつという間に10分が過ぎた。

次はうそ？本当？当てっこクイズ。男の子が「ボクは国語が得意だ」と問題を出す。みんなはガヤガヤと言いつつ、本当だと思う人は立って、うそだと思えば座る。みんなが答えをせがみ始めると、男の子が「うそー」と叫び、場が沸く。自分の好きな教科や学校のテストのことなど、子どもたちの声が飛び交う。次の出

題者に交代し、クイズは続く。

「この部屋にあるもの、手のひらに載るほどのもので、好きなものをさがしてみようか」。進行役の岩橋さんのこんな提案に、さっそく子どもたちは部屋中を駆け回る。見つけてきたものを手に、子どもたちが床に座り出すと「じゃ、その持ってきたものを、みんなに紹介してみよう」と振ってみる。「名前はパンチ。穴を開けるのが仕事。ここが目でここが口。恥ずかしがりやの僕は裏が顔。いつも伏せがちなのです」小さなグループができ、おもちゃや文具、置物などを手に、それぞれの身になったつもりで、自己紹介に挑戦する。

「こっちがお母さんで、こっちが子ども」。自己紹介がひと段落すると、子どもたちの手にとろがるものが語り始めた。「じゃ、手のひらのものを使って、物語をつくってみよう」。

親子の物語を演じるグループ。子どもの独り立ちを寸劇にまとめたグループ。こどもの里の元メンバーを振り返るグループもあった。命が吹き込まれた手のひらの鉛筆やボールなどから、子どもたちの記憶を映し出す物語ができた。

ものに見立てて、ことばにしたり、演じたりすることで、場を活性化させる。今回は、こどもの里にいつもあるものを利用した。みんなにとって身近なものだけに、記憶を重ねた物語は、その場で共有しやすい。日常慣れ親しんでいるものだけに、そこでの発見に驚きも加わる。記憶を演じると遊びになる。そんな、ごっこ遊びを通じて、体を使った表現や、グループ単位の共同作業に、磨きかけた。(平川)



10月9日(木)
『想像の世界 気持ちで歩く』

会場：こどもの里
時間：16:00～18:00
人数：児童12人 スタッフ9人
進行：岩橋由莉

「ここはスケートリンクです」と岩橋さんが合図を出した。何事もなく立っていた子どもたちが、床の上を転げ回った。「わ、煙が出てきた」「姿勢を低くして」。バタバタと逃げ回る子どもたち。いつもの部屋から、別世界へとワープする。もしもの気分を味わうワークショップが始まった。

想像のフィールドを駆け回る。今度は陸上大会だ。リレーアンカーになりきりゴールの瞬間を演じる。もちろん世界一のランナーになったつもりで、大きく腕をふり、胸を突き出す。部屋の中央をゴールラインに見立て、ありったけの力を振り絞る。

なりきりは続く。「いやな気持ちで家を出たときを想像してみよう」と少し難しい注文に、子どもたちは試行錯誤を繰り返して広げた。しょぼんと沈んだ顔で「今日、宿題できてないや」とぼやく。しかめっ面したり、眉間にしわをよせてみたり、みんなの顔

に力が入る。「次は、うれしい気持ちで」。ひゅっと力が抜けた子もいれば、緊張した面持ちのまま苦笑いする子もいる。悪戦苦闘する顔は、表情豊かだ。

次は、あいさつ一つでいろんな世界を歩く。まずは、超有名人になったつもりで「こんにちは」と。「いや、どうも」「わ、有名人だ」。なり手と受け手で半々に分かれ、部屋中を歩き回り、あいさつを交わした。先生、近所のおじさん、10年ぶりに会った友だちなど、いろんな人物に臨んだ。いつもと違う自分を演じることで、周りに広がる世界をがらりと変わる。

最後に、立体写真に挑戦した。グループに分かれ物語を考える。物語の全身でポーズをとり、顔に表情を加える。キーワードは家である。

「おかあさん、悲しいな」「あなたは」「父です。子どもが自立し、家を出ました」「うれしいです」子の成長を描く家族写真が出来上がった。

「はーやくこい、やまにこい」寂しい桜を演じる女の子に、仕事の忙しい親はかまってくれない。そこでおばあさんの家に遊びに行く。次のグループは、一本の桜を写真にした。

驚く友達と、複雑な僕。浮気する父のことを友達に相談する。おこった顔の母と父からは、複雑な様子が伝わってきた。最後のグループは、親と子と友が登場した。

どれも実体験にもとづくワンシーンが織り込まれていた。言葉にしがたい家族の風景が、描写される。数回のワークショップを経て、子どもたちの居場所をたどってきた。そこには、まちがあり、学校があり、こどもの里がある。最後に現れたのは、居場所の最小単位でもある家。閉じた世界の家を、いとも楽しげに表現したのは、演じる力だった。(平川)



10月19日(日)

『まちに出る 子どもたちの見方』

会場：こどもの里・

ホテル中央の屋上

時間：14:00～16:00

人数：児童 15人 スタッフ 9人

進行：原口 剛

日曜日の14:00。子どもたちが、にぎやかに遊んでいる。「怖い話をして」「何をするん」「いつもと時間が違うね」みんなが次々に声をかけた。

今日は時間に余裕のある休日を利用し、外に出てまちを改めて見ることにした。みんなが向かう先は、建物の屋上。釜ヶ崎のドヤで、今は外国人バックパッカー向けの宿泊施設のひとつ、ホテル中央の屋上から見える風景を描く。進行役の原口さんが「今日の教室は屋上です」と大きな声で呼びかけた。

今回のワークショップから、より地域や社会の記憶を意識したプログラムを取り入れる。こどもの里に来た当初は、躊躇せず発言できる場面は、まだまだ少なかった。子どもたちの表現も、どことなくぎこちない。しかし、回を重ねるごとにそれは薄まり、子どもたちの好奇心の矛先が見えるようになった。

原口さんは、地理学者で、釜ヶ崎

の戦後史をはじめ、都市論などを研究している。いつもと違う見方でまちを捉えるプログラムを導入した。舞台は地上15階の屋上。給水タンクやエレベーターの塔屋、そして屋根がどこまでも広がる。そんな屋上で、子どもたちと絵を描き、まちの風景を切り取ってみることにした。

中学生の明子さん(仮名)は、向かい側の外国人向けの簡易宿泊所ドヤの建物を描いていた。紙を洗濯ハサミでフェンスに固定し、もくもくと絵に向かう。「この階段が難しい」。階段を立体的に描くことに苦戦していた。「いい感じにできた」「丁寧に描けたね」「ここらへんで一番大きく四角い建物」「へえー、他に何があった?」「三角屋根の建物がたくさん、それと煙突」。一緒にまちを見回す。確かに戦後焼け残った木造長屋などの建物が点在し、銭湯の煙突も見えた。中層のドヤに囲まれた街路からは、なかなか伺い知ることの

できない、まちの様子だ。

小学生の雅史君(仮名)と将太君(仮名)は、通天閣を描いていた。「何を描いているん」と聞くと「飛行機」と返ってきた。よく見ると、通天閣を横切る飛行機を黒いペンで塗っていた。他にも、通天閣を描いた子どもも多い。しかし、塔の骨格を緻密に描く子、看板の字を忠実に描く子、最初に描いた塔なんかそっちのけで周りの建物や看板で画面を埋めていく子どもなど、十人十色である。地元の塔も、視線を注ぐポイントは違う。後半は、みんなの絵を見て回りながら、お互いに見つけた風景を確認し合った。

ひとつの舞台で個人作業をもくもくとする。同じ場所だからこそ、違うものが見えてくる。みんなまちの一瞬を切り取り絵にすることに夢中になっていた。(平川)



10月30日(木)

『昔の写真 まちへの関心アップ』

会場：こどもの里

時間：16:00～18:00

人数：児童13人 スタッフ7人

進行：原口 剛

以前の通天閣からは、天王寺公園に向けてロープウェイが伸びていた。毎日炊き出しが行われる三角公園では、子どもたちがブランコで遊んでいた。今回は、釜ヶ崎を写した昔の写真を用意。子どもたちと昔の釜ヶ崎の記憶をたどる材料である。

「この写真、みんなが生まれる何十年も前の写真です」と進行役の原口さんが口火を切った。「通天閣や」「知ってるで」。他の写真も床に広げる。「あいりんセンターが建つ前は、お菓子工場だったんだよ」「わたし、この上に住んでる」「瓦屋根の建物がたくさん」「三角公園にめっちゃ遊具がある。緑も」。子どもたちは写真を手に、気づいたことをしゃべり合った。

「みんなが描いた絵と同じ建物がありません。どの写真かな？」と原口さんがクイズを始めた。写真の中から、屋上で見た風景と同じ写真を探し出す。明子さん(仮名)が描いたドヤを指差したのは小学生の男の子だった。「こ

の写真、他に何が写っている？」「低い建物」「三角屋根の建物」「煙突」。屋上から見た木造長屋が、高い建物に遮られることなく写っていた。

「じゃ、この感じで今と昔の間違い探しをしてみよう」。エンジンが掛かってきた子どもたちは、どんどん絵と写真と記憶を頼りに、変わったもの、変わらないものを見つけていく。中学生の淳君(仮名)は、看板に注目。昔からある店やドヤを、事細かに見つけ出した。「おい、この看板、今もあるで」と昔の写真を見ながら、次々と発見していく。新旧の違いなど、男の子はまちなみの変化に関心を持って目を輝かせた。

今度は、より昔の釜ヶ崎を描いた絵図をみんなで見る。「この絵は江戸時代のもんです」。原口さんの説明に続き、「侍が歩いている」「海もある」「建物が少ない」と子どもたちは発見を次々と口にする。「秀吉さんも西成警察の前を歩いてたんや」「海の底？

わあ一魚がこころへんを泳いでる」と女の子たちがまちの物語を演じ始めた。

「海だった頃から今の釜ヶ崎まで、旅してみよう！」。釜ヶ崎の海へ、上町台地の山へと、食べものを求めて歩き回る。そして、街の時代。「私たちの近所に通天閣が」「しかもゴンドラ付き」「しかし、空襲でまちは焼けました」と原口さんが声を重ねる。都市の時代になると、「息子通天閣登場！」。まちの復興が進む。「未来のまちって、何するんやろ？」とこの時点で、ワークショップは終了する。

今回、子どもたちは、見たことも触れたこともない過去から、現在に向かってまちの記憶をたどった。まちを物理的にも感覚的にも角度を変えて見る。すると、今と昔の違いや、今のまちがつけられていく物語など、まちと自分を関係づける糸がつむがれた。(平川)



11月6日(木)

『あしたの地図に 小さなオアシス』

会場：こどもの里

時間：16:00～18:00

人数：児童9人 スタッフ6人

進行：森 洋久

「ちょっと手伝って」。地図づくりの準備を始める。「今日はね、地図の専門家、森さんと明日の地図をつくります」。森さんは、地理学で地図の研究を始め、巨大なひとつの地図に、表現するワークショップを各地で開催する。

「ここに上町台地をつくるから、もっとマットで高くして」「そんな感じかな、ここら辺が釜ヶ崎」。地図は白紙、でも地形は再現する。約5m四方の釜ヶ崎と上町台地ができた。でんぐり返しをして遊んでいた子どもたちに、今日は絵を描くから、筆と絵の具を広げると、みんなが集まってきた。

まずは道を描く。線路も加えて、地図らしくする。でも、ここからは普通の地図づくりとは違う。前回の現在・過去・未来の記憶を振り返り、

後は子どもたちの手に任せる。色とりどりの場所が、描きこまれていった。

「ここな、公園で遊んでるんや」「何して遊ぶの?」「そやな、ブランコとか、ケイドロとか」。子どもたちは、絵の具を次々使い、絵を膨らませていく。

始めは1人で描き始めた子どもたちも、2,3人のグループができ、描かれる場所も複雑になり始めた。動物だけだったところに、銭湯ができ、動物たちが風呂につかる。女の子の家の周りに、友だちやスタッフの家が建ち並ぶ。釜ヶ崎の騒動を見た子どもたちは、西成警察署を描き、警官と犯人のやり取りを描く。昔、海だったことを思い出し、魚をみんなで描く。学校や通天閣、西成警察署や上町台地の四天王寺など、大体の位置関係は保ちつつも、その間を埋めるように摩訶不思議な場所が

くられていった。

今回、再現した地形は、より高いところを子どもたちに意識させた。「ここは山のとっぺんやで」「ここにはお化けの鹿が潜んでいるんや」「上町台地の五重塔も高くなるで」「通天閣も上には神さまがおる」。一段、高くなった上町台地や周辺には、高さが売りの場所が描かれた。

一方、平坦な釜ヶ崎界限では、歴史を感じさせるものも混ざってくる。海だった時代や、村ができたころの時代が同居している。

なんとなくその土地の特徴を感じ反映させた子どもたち。しかし、それは表面上の地域らしさではなく、もっと感覚と体験に根ざした場所の記憶として伝わってくる。「えー、もっと描きたい」と子どもたちが叫ぶ中、終わりの時間が来た。(平川)



森 洋久プロフィール

1968年生まれ。東京大学理学系研究科情報科学専攻博士課程退学。東京大学総合研究博物館助手、国際日本文化研究センター助教授を経て、現在大阪市立大学文学部地理学教室准教授。様々な学術資料のアーカイブ、特に空間情報を中心としたアーカイブの方法を研究する。

現在は、様々な空間情報をインターネット上でつなぎ合わせる GLOBALBASE プロジェクトを推進する。

11月20日(木)

『未来の記憶 場所の物語に』

会場：こどもの里

時間：16:00～18:00

人数：児童11人 スタッフ7人

進行：森 洋久

「この前は、こんな絵を描いたね」「これ、私が描いたやつ」「何やこれ」。みんなで絵を見て、おしゃべりすることから始めた。今回も引き続き、明日の地図づくりを進める。前回、参加していないきよんとした子どもたちもいる。説明も兼ねて、おしゃべりを盛り上げながら振り返った。

今回は、描いた場所の物語をつくる。おしゃべりを膨らませ、子どもたちから、場所の特徴や出来事、登場人物などをききとっていく。これらをスタッフである大人が書きとめ、物語の種を集める。大きな地図の様々な場所で、大人と子どものききとりが始まった。

大人に話かけられて、勢いづいてきた子どもたち。「通天閣が200階建てになるの?」「そうや、上には神様がすんでるんやで」「こっちは」「四天王寺の五重塔、まちを見守ってる」。

中学生と小学生の男の子が自慢げに未来の塔を説明してくれた。「上町台地の向こうの山には、お化けの鹿や果物のなる木がいっぱいあるんよ」と小学生の女の子は、山奥を想像する。「これ、私の家。13階建ての一番上よ」「おれんちは、この四角い建物」「これはミカ(仮名:こどもの里スタッフ)の家。プール付き」。小学生低学年の子どもたちが、自分たちの家を紹介してくれる。どれも今よりも高い建物になっていた。

「これなんやねん」と中学生の男の子が聞く。「風呂、動物たちの銭湯」とまだ字を思うように掛けない3歳の女の子が答える。男の子は、代わりに場所の説明を書いてあげる。大人と子どもの関係が、子ども同士の中にも広がった。

今回、描かれる場所、物語の内容は、どんな多様性さえも認めているような、

混沌としたものである。とりわけ洗練されているわけではない。どちらかというと、稚拙さが目立つものばかりだ。しかし、このあべこべな場所の総体こそが、まちであり、それを共同作業で形にすることに意味がある。「子どもたちと一緒にないと、できないよね、この作品」とこどもの里のスタッフが言った。

ワークショップの最後に、場所の物語を披露していく。思い出の記憶、外に出て見つけた記憶、昔の写真から知った記憶、未来への思いの詰まった記憶など、いろいろな色をまとった地図が出来上がった。一つ一つは小さな記憶でも、子どもが背丈いっぱいに描いた地図は、大人の記憶にも突き刺さってくる。「これらってもいい」。男の子が、端切れの紙を手に、心はずでに次の物語へと向かっていた。
(平川)



僕らの今を表現するワークショップ「あしたの地図よ」

岩橋由莉

今回の活動は「ドラマ教育」をベースにプログラムされたものだが、その目的は「シアター」と「ドラマ」の二つに分かれる。「シアター」は舞台上で表現することやそのための一連の準備課程を指し、舞台製作におけるプロセスの様々な要素から学ぶことや、上演に際しての観客とのコミュニケーションの体験から得られるものを目指す。一方「ドラマ」は、子どもたちが演劇的技術を学ぶことよりも、演劇という媒体をつかって様々な人の生き方を体験的に感じ、理解することが大きな役割とされている。ドラマ教育ではこれらのバランスがそろって始めて人間が豊かになるとしている。

今回こどもの里で行われたワークショップでは、作品の完成や、表現技術の上達を目指すような「シアター」活動にしない、と最初から決めていた。一年がかりで複数の大人たちが関わるプロジェクトの一番最初というポジションである。活動プロセスとして、毎回内容は変わっても、心身の解放、集中する経験をしてメインの活動へいくという流れを固定して作った。

メインの活動の前には必ずガス抜きのような身体を使ったあそびを行った。そこで日常の疲れやストレスを発散することや、自分の表現を安心して出せるような環境を整えた。次に集中を要する活動へ。聴く、見るなど五感を使った活動を多く取り入れて感覚を研ぎ澄ます準備を整えた。こうすることでより多くの情報が彼らの身体に入り込み内面が活性化し、豊かな表現へと導かれていくことを助ける。そこでは正解が一つではないという活動もたくさん行った。例えば音楽を聴いてその場면을想像する活動である。同じ音楽を聴いているのに、個々に全く違う場면을想像していることをその後の話し合いで参加者は知る。そしてメインの活動へ。そこでは想像すること、想像したことをまずやってみる事を積極的に行った。想像したことを身体で表現していくこと、皆に伝わるように工夫しながら話し合いをする活動は、全て、明日の自分の未来を作っていくとても重要な基礎能力となる。子どもには思い通りに表現できないことを何度も繰り返していく辛抱強さも必要になるし、また周りの大人も待つことや見守ることを学ぶ必要がある。また投影活動も行った。ぬいぐるみや、積み木などを使ってそのものに自分の気持を投影させ話してもらおう。スポットが自分ではなく、ものにあたるため、子どもたちは安心して自由に表現できる。この活動には、こちらが思った以上に子どもたちが熱中したのがとても印象的だった。

今回の一連の活動のすべては、何かを完成させることを目指したわけではない。活動する人数、年齢層が毎回定まらないため、用意したプログラムが半ばで終わることや変更を余儀なくされることもしばしばあり、常に柔軟性が必要とされた。想像すること、表現すること、他の人の表現を見ることを柱に、「人とどうつながっていくのか」を実践していく場であろうと心がけた。

回を重ねるたびに彼らはこちらを少しずつ受け入れてくれ、みんなの前で話すことや表現することに躊躇がなくなることが少しずつ増えていった。手をつなぐとこちらの手を握り返す力が強くなった。

私は常々「ドラマ活動」とは種まきのようなものであると思っている。いつ発芽するとも分からない種をまいているようなものだと。発芽のきっかけは子どもたちそれぞれの機会を待たねばならない。ファシリテートする側がやれることは、それがいつ大きく成長し花開いてもいいように土壌をやわらかく、水遣りを忘れずにする環境を整えてやることのみである。しかし、そうしているといつのまにか、こちらの土壌もやわらかくなっていく事に気づかされる。そしてついには種をまかれているのはどちらか分からなくなってしまうこともある。人と人が本当につながるとは、ある場面そういった関係になることではないかと思っている。

事実、こどもの里の活動を終えるとこちらがとても元気になっていたことに気づかされた。

[プロフィールは23ページを参照]



現在の萩之茶屋1の5付近



場所をプロジェクションする力

平川隆啓

1. アート NPO による場所の表現

1-1. こたねプロジェクト

「こころのたねとして一記憶と社会をつなぐアートプロジェクト（以下、こたねプロジェクト）」は、いくつかの取り組みから構成された表現企画である。表現するのは「記憶の中にある場所」だ。「釜ヶ崎」を舞台に、このまちに関わる人たちからライフヒストリーを聞き取り朗読発表するプロジェクトや、このまちに暮らす子どもたちが巨大な地図を描くプロジェクトを行った。そこには詩人、地理学者、ラッパー、表現教育家、美術家など、異なる領域の表現者たちが参加し、個人の中の記憶を社会へと顕在化させるべく模索を試みた。これらは、アート NPO が釜ヶ崎というまちと関わる中で端緒を開いた活動の一部である。

2007年にスタートした「こたねプロジェクト」は、時間をかけるごとに成長している。特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋（以下、ココルーム）のあったフェスティバルゲートを取り巻くまち「新世界」を舞台に、他者への聞き取りから、その人が持つ記憶を引き出し、表現することから始まった。さらに朗読という表現の場を設定し、より多くの人へと伝達を試みた。個々人の記憶を社会へとつなげるための「たね」として、この手法が導き出される。記憶の中には家族や仕事、住民などの社会的な関係の中でつむがれた場所が息づく。聞き取りから舞台発表としての朗読を行うことで、社会的記憶としての場所は、他者との共有を図れる公共的な知として表現される。

また、関連プロジェクトとして「あしたの地図よ」を行った。子どもたちから大人まで、様々な人たちとともに巨大な地図をつくる。自ら描くことで、場所の感覚を豊かにし、地図をもっと身近なものとして取り込む。記憶の表現手法としての、もうひとつの実験である。

この年の取り組みは『こころのたねとして 記憶と社会をつなぐアートプロジェクト』（こたね制作委員会）として、1冊の本にまとめられる。この実験的な取り組みを丁寧に検証することで、社会的記憶を表現するための手法として整理された。

2008年は、この他者への聞き取りを、釜ヶ崎で行った。さらに釜ヶ崎との関わりの中で、地域の子ども施設「こどもの里」で定期的にアートワークショップを開催した。表現教育を通じて、子どもたちに他者と表現する面白さを体験してもらおう。アートワークショップは2007年5月から月1回程度のペースで継続している。この通過点として、「あしたの地図よ」をプログラムに加えた。釜ヶ崎で暮らす子どもたちの過去や未来といった感覚が、一つひとつの場所として描かれた。子どもと大人、それぞれ異なる対象へとアプローチすることで、表面だけではとらえることのできない記憶の中の釜ヶ崎に目を向ける。

これら場所における表現を束ねることで、こたねプロジェクトは漸進する。2007年の新世界から、2008年の釜ヶ崎と都市の中を移動し、そのまちで場所の力をプロジェクションする。そんな取り組みの一端である。

1-2. こころのたねとして 釜ヶ崎聞き取りプロジェクト

都市を形成する一つひとつの場所には、土地の歴史が刻み込まれている。し

かし、都市の表層では急速に開発が進み、場所の変貌からその差異を読み取ることは容易でない。歴史の連続性を非常に感じにくくさせる。都市の開発が進む。歴史という価値を、時間的な連続性として考えるなら、見かけの差異だけではなく、そこに住まい関わる人々の「記憶の連続性」を再構築する必要がある。ライフヒストリーを軸にとることの意味は、そこにある。

今回は、様々な時間を経てきた高齢者と向き合う。聞き取りを行ったのは、釜ヶ崎で50年近く暮らす小林さん、シスターとして支援を続けるマリア、釜ヶ崎の労働者と運動する山田さん、紙芝居劇グループで交流を楽しむ本所さん、生活保護を受けながら釜ヶ崎の案内などをする浅見さんの5人である。この5人にたどり着く間にも、様々なライフヒストリーに迫った。商店街で服飾店を営み続ける女性、西成市民館のふれあい広場で毎週のように美空ひばりを熱唱する男性、釜ヶ崎のドヤを運営してきた男性、生活保護で暮らす絵の得意な男性などである。

聞き取りは、詩人の上田假奈代、地理学者の原口剛、ラッパーのSHINGO☆西成、表現教育家の岩橋由莉、美術家の岩淵拓郎の5人である。異なる分野の人がそれぞれの手法で聞き取りを行った。多様な領域からアプローチすることで、表現に幅を持たせ、多くの人が実践できる手法を実験した。

聞き取る相手もまた多様であり、このまちには実に様々なライフヒストリーを持つ人が集まることに気づかされる。自らの出身地や、このまちに来た経緯、そしてまちへの関わり方などの違いがあらわれてきた。しかし、釜ヶ崎といえば、日雇い労働者のまちとしてのイメージが先行し、それにまつわる問題意識が社会的に浸透している。ドヤの建ち並ぶ景観、三角公園などで行われる炊き出しの光景など、見かけ上のインパクトが強いことに起因するからかもしれない。聞き取りを通じて再構成された場所のイメージは、このような状況とは異なる側面で語られた。地域というまとまりの中で、表面的に読み取るだけでは分りえぬ場所の力として感じるができる。

この成果は、聞き取りのテーマを特に決めずに行った結果だろう。テーマを絞ってしまえば、それに都合の良い人しか集まらない。今回は、あえてテーマを漠然とさせ、釜ヶ崎にかかわる人のライフヒストリーという広い網を広げたことに、釜ヶ崎の記憶と場所の豊かさを導き出そうとした。

1-3. あしたの地図よ 子ども表現プロジェクト

聞き取りを進める一方で、遊びや生活の場として開放される地域子ども施設「こどもの里」では、子どもたちの表現教育を実施した。月に1,2回のペースで2007年5月から11月にかけて10回行う。以後もプログラムを変え、定期的にアートワークショップを継続している。2009年3月末日までに、計16回のアートワークショップを実施。来年度も継続の予定である。

1回目から6回目までは、身体表現をベースに表現あそびを行った。7回目からは、釜ヶ崎の歴史についての学習や地図表現など、表現教育をふまえた地域に対する感覚を深めた。

毎回、1時間半ほどのプログラムで放課後等に集まる9～15人の子どもたちが参加した。こどもの里スタッフの協力と、ココルームから参加するボランティアスタッフも1～4人ほど加わり、ワークショップを盛り上げていく。

こどもの里には、釜ヶ崎に暮らす子どもたちが多く、今回の参加者には聴覚に障がいのある子どもや、外国籍の子どももいた。親が就労困難な場合や、両親の離別、虐待など、生活が不安定な子どもたちが中心である。誰でも安心して利用できる、そんな多様性をはらんだ場所が、こどもの里だ。

この多様性といかに関係を築くかという問題と向き合うために、まずは表現教育が取り入れた。1回目「音に出そう 体で遊ぼう 言葉にしよう」では、進行役を、岩橋由莉、小沼亮子、上田假奈代の3人が担当し、表現あそびを実施した。名札を使った自己紹介を手がかりに、コミュニケーションを切り出す。始めに、音を使った表現あそびを行う。いろんな楽器を手に、みんなで音を出す。輪になって、一人ひとりが生み出す音をバトンタッチさせる。つながり始めた音に、リズムや強弱を加え、一体感を楽しんだ。次は、体を使った表現遊びだ。いろんな体の動きにチャレンジした。いつもとは違う動作で、体中を刺激し、より豊かな身体表現を引き出すウォーミングアップをする。最後に、言葉を使った表現あそびを行う。自分の好きな言葉表現し、みんなに伝えるゲームを楽しむ。書いた言葉を他人に見てもらい、さらに言葉を重ねる。言葉から相手の気持ちに迫った。

2回目以降も、表現あそびを取り入れたプログラムを、岩橋が中心となって継続する。2回目「遊びで体中を動かそう」の内容は、1) 自己紹介 2) 輪になって表現あそび 3) 二人組みで表現あそび 4) グループで思い出を話そう である。3回目以降も、ペア、グループ、全体など異なる相手と組みながら、表現あそびを積み重ねた。

4回目では、「思い出を地図に」で地図づくりを実施する。1回目から続く表現あそびと、そこに組み込まれた思い出を話すプログラムは、思い出から場所を想起し物語を構成する地図づくりとして反映される。最後の発表では、思い出の詰まった色とりどりの地図を舞台に、場所の物語を披露した。子どもたちは、絵・ことば・身振りなどを複合的に使って表現を楽しみ始めた。

表現あそびに勢いついてきた7回目からは、進行役を原口剛に変え、内容も地域に目を向けるものとした。7回目「高いところからまちを描く」では、釜ヶ崎界限を見わたせる屋上にのぼり、風景を描いた。8回目「このまちの歴史」は、古写真や絵図などを使ってまちの風景をさかのぼりながら、まちの歴史について学習する。過去・現在・未来など時間を軸にとり、このまちの風景を子どもたちと想像した。

9回目、10回目は進行役を森洋久がつとめ、地図づくりを行う。過去・現在・未来のまちを想像した子どもたちと、釜ヶ崎の地図を描く。地図は、未来のタワーや街道を歩く侍など、長い時間軸にわたるまちの景観をとらえたものとなった。場所の連続性を、豊かな想像力で表現した大作ができあがる。

多様性のある場所だからこそこの関係づくりから、お互いの記憶と想像力で埋め尽くされたこのまちの地図表現まで、様々なワークショップを通じて実践した。この表現の豊かさが、「あしたの地図よ」の特性となっている。

2. 場所に関するリテラシー

2-1. 聞き取りと場所の文化表現

聞き取りを通じて見えてくるものに、その人が経験してきた場所がある。そして、今を過ごすまちの中で、居場所は自分にとって身近な景観である。

今回、聞き取りを行う場所は、聞き取られる人、つまり釜ヶ崎に関わってきた本人に決めてもらった。訪ねることとなったのは、自宅や、喫茶店、仕事場、コミュニティスペースなど、このまちでの居場所である。他者の居場所に身を置くことで、記憶を想起しようという試みともいえる。

しかし、聞き取りからは、この現在の居場所についてではなく、この場所にたどり着いた経緯が引き出された。5人とも、釜ヶ崎に居場所を見つけるまでの歴史を語ることになる。この物語は、もちろん聞き取る人は見たことのない場所が登場する。しかし、彼らの話に耳を傾けることで、鮮明なまでに場所の説明が行われる。

上田が聞き取った本所さんのケースでは、生まれ育った島田東町59番地を丁寧に案内してくれた。家の間取り、近所の風景、側を流れる川など、土地の様子を伝えてくれる。岩橋が聞き取った小林さんも、釜ヶ崎に来た当時の雰囲気や、特に近所の様子を最寄りの店や建物の特徴など、息子との出来事をまじえて再現してくれた。

様々な歴史の上に、現在の居場所がある。しかし、その歴史は変貌し続ける都市をつぶさに見るだけでは、なかなか読み取れない。この見えない場所の連続性は、ライフヒストリーでもって補完しあうことができる。ライフヒストリーを再現する聞き取りと朗読は、場所や地域につながるための文化表現となりうるのだ。

2-2. 地図づくりと場所の経験

聞き取り同時に、こどもの里でアートワークショップを実施してきた。この連続的な関与により、子どもたちとの関係が築かれる。関係づくりのプロセスを反復することで、表現のための環境が整えられた。

地図づくりは、この関係を活かして行われる。テーマは、思い出と、まちの歴史である。思い出をテーマにした地図づくりでは、子どもたちの思い出を引き出し、それを自分たちのあそび場所として描いた。

地図を描くことを通じて、子どもたちはあそんだ体験や学んだ経験を、自分たちの場所として伝えようとする。例えば、夏休みにカブトムシを捕まえた思い出では、森とそこに集まる昆虫たちであらわす。古い絵図で見た街道の様子は、現在、街路樹のある道に豊臣秀吉を歩かせ再現した。自分の中の記憶を伝える手段として、場所に置き換えて表現する。子どもたちは、記憶を自在に場所へと置き換えることで、体験・経験を共有し、このまちへの理解を深めていった。

2-3. 場所を他者に伝える

こたねプロジェクトでは、50年近く住み続けた家でライフヒストリーを聞き取ったり、子どもと思い出の場所を描いたりした。このライフヒストリーや思い出といった客観的な指標を持たない事象を他人に伝えるために、それらは場

所に結びつけ特徴づけられる。商店街の漬物店にやさしくしてもらったとか、遊具のたくさんある公園で遊ぶといった具合だ。

記憶と場所が密接に関係する。そして、その記憶を掘り起こし、朗読や地図といった表現手法で再現するこのプロジェクトは、場所に新たな意味を付与する契機となりうる。場所の特徴を丁寧に読み取り、顕在化していく作業の過程で、まちの中の、あるいはライフヒストリーに息づく場所を他者へと伝えようとする外向きの力が働く。この場所に関するリテラシーは、変貌し続ける都市で一人ひとりの歴史を束にし、自らの地域や都市を再構成する力となりうる。

3. 接続点としての場所

3-1. 蓄積される関係と蓄積されない関係

こたねプロジェクトを積み重ねることで、社会的な人間関係の形成は地域内外へと拡大している。

ココルームは、インフォショップ・カフェ ココルームを運営している。ここには、ボランティアを希望して来る人も多い。ボランティアをよく、こどもの里の手伝いやイベント、夜回りなどに参加させる。しかし、このアプローチはボランティアに限らない。このような関係性をココルームに来る様々な領域の人に持ち込む。偶発的な接続の機会として、こたねプロジェクトによって形成された関係を活かしている。

こどもの里アートワークショップの参加した人には、運営スタッフ以外にも、表現教育を学ぶ教育関係者、紙芝居劇むすびのメンバー、大学生、写真家、日雇い労働者、野宿者支援する人、コミュニティアートの実践者など、領域を問わない。

その関係性も紙芝居劇むすびのメンバーのように、地域内からの参加につなげることで、地域における組織間での協力を容易にする関係が生まれる。地域力といった蓄積される関係として有効に働く。

一方、遠方から来る学生などは、外部との関係を拡大させる。その事例として、明治学院大学の学生が、次々とココルームに来て釜ヶ崎で社会体験をして帰る。一見、従来のインターンシップにも似た関係だが、大学が用意したキャリアアップのためのカリキュラムとは大きく異なる。その動機は学生の地域への関心に依拠するところが大きい。地域に興味・関心を抱いた学生が、新たにココルームを訪れるという循環が生まれている。この循環は、釜ヶ崎での経験を自分たちの地域で活かしてみたり、同じ地域の別の人が釜ヶ崎を訪れたり、新たな回転を起こしながらスパイラスする。この蓄積されない流動的な関係は、社会に働きかける動きとして役割を果たしえる。

3-2. 場所の記憶の循環

このように、接続点としての場所は、地域内の人間関係を豊かにするとともに、都市や社会へと橋渡しする回路となる。こたねプロジェクトで表現された無名な記憶も、この回路に乗せることで、広く共有させることができる。朗読発表会では、こたねプロジェクトに関心を持った地域内外から集まる参加者に、朗読という詩的な表現によって伝達することができる。しかし、単発で行われる

ため、この機会に加われなかった人びとへの伝達は困難である。他方、小さな事例として、岩瀬が聞き取りを行ったマリアの聞き取り作品にある野宿者のエピソードを、地域外の人に釜ヶ崎を案内するとき、上田が取り上げている。このように聞き取り作品を公共的な知として伝承する機会も見逃せない。

この記憶の伝達回路はまだ未熟である。しかし、接続点という場所を持つことで、聞き取りで再構成された記憶を利用する機会は、地域としてのまとまりの中で見出されていくだろう。今後は、社会的な記憶をこのまちで活かすことが課題となる。

4. 記憶と地域をつなぐ可能性のたね

4-1. ワークショップ的なイベント

様々な参加者を巻き込みながら、こたねプロジェクトの実験的なプログラムを展開してきた。このプロジェクトを通じた地域との関わりのおかげで、ワークショップ的なイベントが生み出されている。

こどもの里でのアートワークショップは定期的開催され、地域の高齢者に話しを聞く機会も増えた。こどもの里との関係は、アウトリーチするだけに限らず、運動会やクリスマス会にも参加するなど、双方向の関係が築かれつつある。また、古写真を使って記憶を掘り起こす集まりも開催され、高齢者によって様々な地域の特徴がよみがえりつつある。これらのイベントには、共同作業による創造や、双方向的な意識の共有といった、ワークショップとしてのニュアンスが含まれている。ワークショップと定義できる精度は持ち合わせてないが、そのスタンスはワークショップ的である。そんな、記憶と地域をつなぐワークショップ的な場が形成され、文化表現の機会が少しずつ生み出されている。

4-2. 小さなボランティアアクション

このようなワークショップ的な場には、ボランティアな参加が欠かせない。こどもの里でのクリスマス会（2008年12月）にはこたねプロジェクトメンバーの原口や、ココルームやSHINGO ☆西成とも関係のある写真家の竹田俊吾、ココルームに居合わせた学生など、様々な人が参加した。原口はこのプロジェクトを通じてサンタクロース役としての応援を頼まれ、駆けつける。ココルームの紹介で、こどもの里の子どもたちを撮影・作品制作したことのある竹田も、子どもたちと遊びに加わった。クリスマス会のある日に偶然居合わせた人にも、ココルームではこどもの里を紹介し、きっかけをつくり出す。この参加の機会を、プロジェクトを通じたものと、場所の運営を通じたものと、両面から提供することで、小さなボランティアアクションの芽を育てている。

4-3. ネットワークの形成と場所のデザイン

ボランティアな参加を促すしくみとして情報と機会の提供があるなら、そのしくみをまわすためのプラットフォームのひとつに、ネットワークの集まる拠点がある。まさにココルームはこのネットワークのための実験場といえる。ココルームに来る人は、労働者、若者、写真家、研究者、ヘルパー、学生など、実に多様だ。この許容力の高さが、ネットワークを拡大させていく。

この複雑なネットワークは、身近な現場で協力・互酬を円滑にする地域内で循環する関係性と、次々と流動することで社会へ拡大する関係性に大別できる。この役割の異なる蓄積される関係と、蓄積されない関係を使い分け、人を一箇所に留めるのではなく、地域や社会へと接続していくための場所をデザインすることで、しくみは支えられる。

4-4. 多様性と向き合うための技術

コクルームがその実験場であるように、ネットワークが集まる場所には、しくみを運営するための技術が培われる。その中でも特に、多様性と向き合うための技術が育ち始めている。

コクルームには学生がこの地域に関心を寄せて来ることも多い。彼らは、こどもの里へのボランティアや、釜ヶ崎夏まつりや釜ヶ崎越冬闘争など、地域に積極的に関与させる。そこで、障がい者や野宿者など排除の対象となってきた人や、それを包摂しようと活動に取り組む様々な領域の人など、ひとつの地域で幅広く出会うこととなる。ここでの経験が、包摂を考え向き合うための生きた技術として、広がることを期待する。

アートNPOとしてできることは、まだまだ見えてこない。しかし、この取り組みを通じて、記憶と地域をつなぐ回路をつくり、場所の力をプロジェクションしていくしくみの端緒が見え始めた。この社会の中で、多様性と向き合うための力をつけていくことが、表現の原動力となる。ここから、自分たちの場所を豊かにする記憶と表現の循環が始まるのではないだろうか。

平川隆啓プロフィール

1979年生まれ。広島工業大学大学院環境学研究所地域環境科学専攻修了。現在、特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋の専従スタッフを務める。都市計画の研究とともに、まち歩きやワークショップを取り入れた、市民参加のまちづくりを実践。2008年からは、まちづくり任意団体からほり倶楽部理事となり、アートプロジェクト「からほりまちアート」に関わる。

「うんどろ」としてのココローム

原口 剛

1. イメージのなかの釜ヶ崎

JR 環状線新今宮駅を降り南側を見渡すと、「ホテル」という看板を掲げた建物が林立する光景が目に入る。釜ヶ崎と呼ばれるこの地域は、日本最大の日雇労働市場（寄せ場）であり、簡易宿所（ドヤ）と呼ばれる安価な宿に、二万とも三万ともいわれる日雇労働者が生活を営んできた。過酷な労働、不安定な居住、脆弱な社会保障、そして、その帰結としての野宿生活者の姿。この土地には、日本の社会・経済的矛盾が凝縮され、刻み込まれている。

「釜ヶ崎」という地名は全国的に知られているが、しかし、どこからどこまでが「釜ヶ崎」なのかを、正確に答えられる人は誰もいない。なぜならこの地名は、簡易宿所が集中し、日雇労働者が集住する地域を漠然と指し示す通称であり、厳密な境界を引くことはおよそ不可能だからだ。地域の労働者はこの土地を、愛着をこめて「釜ヶ崎」（あるいは「ニシナリ」と呼ぶ。また、マスメディアや行政文書のなかでは、「あいりん」と呼称される。このように立場によって呼び方は異なるが、この土地にかかわりをもたない外部のひとびとからは、「釜ヶ崎」や「あいりん」といった地名は、「こわいところ」といった、ネガティブなイメージを付与されがちだ。このイメージに阻まれて、釜ヶ崎でおこっている現実を、伝えられないか、切り取られ歪められて伝えられるのが常であった。釜ヶ崎は、イメージの壁によって一般社会から断絶され、孤立させられてきた。

過去十数年間のなかで、労働や生活をめぐる状況は様変わりしつつある。「フリーター」「ワーキングプア」「ネットカフェ難民」「派遣切り」といった言葉が象徴するように、かつて釜ヶ崎という狭小な地域にのみ凝縮されていた不安定労働・居住そして貧困は、一般社会に遍在するよう見受けられる。それでもなお、イメージの壁はあいもかわらず、高く分厚く釜ヶ崎を取り巻き続けている。この壁に阻まれて、同じような境遇にあるはずのひとびともまた、分断される。数十年にわたり塗り固められた壁は、社会・経済状況の変化とともに自然消滅するものでもなければ、容易く乗り越えられるものもないのだ。

イメージの壁を塗り固めてきたものはなにか？ それは、釜ヶ崎を「特殊な地域」として切り取っては表象し続けてきた、言葉や映像などの表現の集積である（その象徴が「暴動」をめぐる報道である）。とするならば、それを打ち崩し、乗り越えるための礎も、おそらく表現に求められるだろう。

2. 「うんどろ」としてのココローム

2003年、こえとことばとこころの部屋（ココローム）がフェスティバルゲートにて活動を開始、翌年からはアートNPO法人としての活動を展開する。2008年、フェスティバルゲートからの退去を余儀なくされたココロームは釜ヶ崎地域内・山王にインフォショップを開設、新たなるスタートを切る。ココロームという組織や場所の意味を手短かに定義することは難しい。それは、釜ヶ崎とのかかわりのなかで、与えられた定義を外れていく「うんどろ」としてし

か言い当てられないものであるように思われる。ここではその運動性を、筆者の参与観察的な視点からいくつか提示してみたい。

(1) 境界と越境

ココルームの運動性は、まず釜ヶ崎とのかかわりの端緒に見出される。浪速区と西成区を南北に分断して走るJR環状線は、釜ヶ崎を取り囲むイメージの壁を具現する景観である。ココルームが最初に拠点を置いたフェスティバルゲートはこの境界の北側に位置し、南側の釜ヶ崎とは近接していながら、別世界の関係にあった。ココルームは偶然にも、この境界的な位置を与えられた。「ホームレスの表現活動を支援しようと最初から考えていたわけではない。たまたま2003年から得た仕事場が日本で最もホームレスの多い地域に隣接していたからで、それまで私はホームレス問題には何一つ関心がなかった」*¹。

地図は土地に境界を引き、分割する。しかし人々の歩行は、容易に境界を横断し、不意の出会いを生み出していく。開設されたカフェには、いつしか釜ヶ崎の日雇労働者や支援者が集い、「わたしはコーヒーをサーブしながら釜ヶ崎の話聞いて、まちの歴史や背景、課題などを学んでいった」*²。ココルームは、偶然にも与えられた釜ヶ崎との地理的近接性のなかで、釜ヶ崎の住人との越境的交流を育んでいく。ほどなく「アートとソーシャルインクルージョン」を「ココルームの仕事」として掲げるようになり、釜ヶ崎という場所の力に引き入れられるかのように、山王へと越境するに至ったのである。

このココルームの端緒の物語は、境界の両義性に関するミシェル・ド・セルトーの言葉を想起させる。「地図が分割するところを、物語は横切っていく。…物語のなかで境界がさだめられるとき、そのありかたはあくまで両義的である。境界は二重のはたらきをしているのだ。…それは、追い出すふりしながら、よそ者に場を空けてやる。あるいはそれが止まれと、停止を語っているときでも、その停止命令は動かぬものではなく、むしろプログラムどうしの出会いの変化をたどっているのだ。物語の境界画定とは運搬可能な境界であり、境界の運搬であり、メタフォライ〔移動〕そのものなのである」*³。

地図上に境界を引き土地を分割することが、逆に境界を越えるという物語的な運動性を芽生えさせる。ココルームの出自と活動には一貫して、そのような越境の運動性が刻印されている。

(2) 無秩序と公共性

インフォショップ・ココルームの日常は、混乱に満ちている。ココルームの掲げる重要な理念のひとつに、「公共性」がある。公共的な存在であるがゆえに、インフォショップは誰にでも開かれている状況をこころざす。はびろく門戸を開くことは一とりわけ釜ヶ崎という土地では一日雇労働者、生活保護受給者、非正規労働者、障がい者、活動家やアーティストや研究者に至るまで、さまざまな立場の人々を招き入れることになる。物静かに釜ヶ崎の

課題や、アートや研究のことを語る人もいる。酔っ払ってクダを巻き絡む人もいれば、一方的に持論を延々としゃべり続ける人もいる。ときには、喧嘩腰の怒鳴りあいになることもある。公共的であるがゆえに、立場を超えて人々が集い、その結果として無秩序が招き入れられるのだ。これは、皮肉なことに思われるかもしれない。もし公共性の度合いが行儀やマナーを指標として測られるものであるとするなら(そう思われがちなのだが)、無秩序と公共性は縁遠いものに思われるからだ。

けれども両者は、決して相容れないものではない。それどころか無秩序とは、公共性を生み出すための必要条件なのである。著書『公共性の喪失』で知られるリチャード・セネットは、『無秩序の活用』において次のように述べている。セネットは人間の成長過程にたとえながら、公共的なものの可能性は「アイデンティティをすべてがびったりするように総合する青年期の力から、不調和で苦痛な葛藤の経験を現実のものとして受け止める成人期の力への移行」のなかで芽吹くのだと述べる*4。青年期に人間は、純粋な理想社会、こうありたいと願う自分自身を思い描き、それをアイデンティティの支えとして生きる。しかし青年期に人間は葛藤のなかで、現実と理想の乖離や、成し遂げたいと思う行為の失敗を経験する。この不安と挫折の経験が、人間を公共的な存在へと向かわせる第一歩となる。

重要なことは、不安と挫折を経験した後どのように生きるか、という点だ。もっとも典型的なパターンは、自らを諦め、既存の社会秩序や権威に身をゆだねる受動的な生活に退行するものだ。そしてこれが、公共性の喪失を決定づけるものとして、数々の著作のなかでセネットが批判する態度である。

だがもし人が不安と挫折を経て、いかなる社会でも対人関係における苦痛と無秩序は避けることができないことを受け止めるとするならば、それは一転して他者を理解し、そこから公共性を育む力となる(セネットはそれを可能性としての成人期と呼ぶ)。そこから生まれる態度を、セネットは「気にかける」ことと呼んでいる。「気かけられる事柄や人物が、個別的で特殊なものになればなるほど、一層それを気にかけるような可能性と自発性が増大する……こういうわけで、成人のアイデンティティの達成は、人の力の条件なのであり、個人は、自分を傷つけるかもしれない個々の直接的な事柄を気にかける力を発達させるのである。挫折の経験によってアイデンティティの首尾一貫性を揺るがされることで青年は、相容れない他者を気かけ、理解しようとしはじめる」。このとき人間は「新しくそしておそらくは苦しい意味を吸収する能力」や、「しっかりとコントロールできない状況へ自分を投入していこうという自発性」といった新たな力を身につける*5。この成人期にあって、かつて青年のアイデンティティの首尾一貫性を脅かした無秩序や他者性はむしろ、人間の公共性を押し広げる可能性に転化するのである。

都市はそのような可能性に満ち溢れた場である。しかし人は往々にして、都市がもつ可能性から逃避し、それを台無しにしがちだ。そこで、無秩序から公

共性を育むような場所をどのようにつくるかという点が問題となる。「青年にとって社会的な問題は、依然として、経験と探究のために解放された公共の場をどこに見出すかである。これが、現代の都市を計画する際の真の仕事であると私は考えている。都市の病根は…人々が成長し、成人が真に社会的な存在としてあり続けられる場所を提供するという人間的なものなのだ」*⁶。公共性をこのようにとらえるならば、混乱や無秩序にあふれたインフォショップ・ココラムは、他者への理解を育むための実験的かつ先駆的な場所であるといえよう。

(3) 弱さと「うんどろ」

「アートがうんどろであるとき、一夜にしての革命は起こらない。人々の暮らしのなかに根ざし、関係性をつむぎながら、ゆっくりと行われる」*⁷。このように上田假奈代は、ココラムが担うミッションである「アート」を、「うんどろ」として定義している。なぜ、「運動」ではなく「うんどろ」なのか。既存の社会運動や労働運動といった、いわゆる「運動」の担い手としてイメージされがちなのは、権力に真っ向から立ち向かう強い個人だろう。とするならば、ココラムの「うんどろ」はそれとは対極的だ。「どうせ弱いだから、弱い力で実験してみればいい」*⁸。ココラムは、弱さを出発点としているのであり、ひらがな表記の「うんどろ」にはそのような意志があらわれているように思われる。それでは弱さから出発することで可能にするものはなにか？まずそれは、セネットが述べるとおり、挫折や失敗を受け入れる力であり、強い主張を声高に繰り返すのではなく、他者を理解しようと耳を傾ける力である。さらにはセルトーが述べるように、目の前に境界が立ちあがるとき、独特のやり方でそれを越境しようとする力ともなる。

どのようなやり方で？それを、レベッカ・ソルニットは壁と扉にたとえている。ソルニットは「壁は立ち往生する言い訳になるが、扉は移動を要求する」と述べ、こう続ける。「希望を抱くことは、危険を伴う。希望とは結局、ひとつの信頼の形であり、未知なるもの、可能性にすぎないものを…信じることなのである。…律儀な理想主義者が目の前の災難に痛めつけられ、失望を繰り返したあげく、凝り固まった絶望または陰しさを生みだすことがある。また、決定的な語り口を信じることから、嘆きの物語が紡ぎだされることもあるらしい。すべてはひとつの方向をめざすと考え、完全な善でなければ、完全な悪であると見なしてしまうのだ。…壁を糾弾すること、壁の頑丈な難攻不落さを明らかにすることは大切である。病気を治すまえに、診断しなければならないが、そこで問わなければならないのは、どの薬、どの治療法が有効か、どうすれば回復のチャンスが見つかるか、代替治療はどれがいいのか、ということなのだ」*⁹。

「うんどろ」は、強い個人のように壁に向かって真っ向からぶつかる直進的な力ではない。ましてや、壁の高さをおおげさに嘆く批判好きの態度でもない。ココラムの「うんどろ」は、壁の前で迷い戸惑いつつ、扉を探す。境界に出くわしたら、橋をかけようとする。小さくも無秩序な場所から、公共性を育む。こ

れらはいずれも、弱いがゆえの、手探りの仕草なのだ。

3. ココルームが生み出した表現

最後に、ココルームという運動はどのような表現を生み出してきたのだろうか。ここでいくつかの活動をピックアップし、概観してみたい。釜ヶ崎に拠点を置くココルームの運動性は、さまざまな場所へと表現を越境させ、小さいながらもオルタナティブな社会生活の可能性をおしひろげている。

(1) 労働のオルタナティブ — むすびプロジェクト

まず取り上げるのは、紙芝居「むすびプロジェクト」である。むすびのメンバーは、野宿経験を経て、現在は生活保護を受給しながらサポーター・ハウスで暮らす、平均年齢は七十歳をこえた高齢者だ。むすびは、自分たちで紙芝居をつくるだけでなく、お面をかぶり自ら演じ、「紙芝居と同時に芝居が進行するという不思議な様式の紙芝居劇が発明」したのだ^{*10}。ココルームは、マネジメントやコーディネートの側面から、「むすび」を支えている。ユーモアを交えた全身全霊のメンバーの演技には、観る者を圧倒させるものがある。むすびの紙芝居はおおきな反響を呼び、2007年にはついに、イギリスでの公演を実現するまでに至った。釜ヶ崎で発明された表現が、国境をこえたのだ。

むすびプロジェクトのひとつの重要性は、それが労働のオルタナティブを示唆しているという点にあると思われる。労働という概念は通常、労働市場を介した労働力の売買、すなわち賃労働として解される。またそれと関連して、「働かざるもの食うべからず」という言葉がそうであるように、義務的行為として捉えられがちだ。むすびの労働はこれらとはまったく質が異なる。メンバーは、過酷な日雇労働・野宿労働を経て現在は生活保護を受給して生活しており、純粋に経済的な観点から考えるなら、もはや労働する必要性はない状態にある。にもかかわらず彼らは、紙芝居という表現活動＝労働を自発的に志向するのだ。そこには、賃労働の枠組みだけでは捉えられない、関わりや表現としての労働の可能性がある。そこからは、働くことが社会的なつながりを紡ぎだしていくことを意味するような労働を構想することができるだろう。

(2) 教育のオルタナティブ — 寺子屋プロジェクト

2008年5月から2009年2月にかけて、ココルームは釜ヶ崎の「こどもの里」において、連続アートワークショップを企画した。「音で遊ぶ」「からだで遊ぶ」といった五感を使うワークショップや、英語のコミュニケーションの学習など、講師によって内容は多様なものである。筆者もまた、「地域を知る・好きになる」ことを課題とする地理ワークショップの講師として、この企画に携わった。

筆者が担当したのは、全体のワークショップのうち2コマである。第1回には、浪速区と西成区の境界に位置する釜ヶ崎の簡易宿所の屋上にのぼり、まちを見下ろしながら写生大会を行った。「眺める／描く」という、日常的からすこし距離のある経験をつうじて、自分たちのまちを別の角度から再発見してもらいたかったのだ。

この経験を経て、第2回では、地域の歴史を知ることが目的としたワークショップを開催した。ある程度の知識や空間感覚を身につけた高校生や大学生に教えるのであれば、地域史を教えるのにたいした苦労はしない。しかし、向き合う相手が小学校低学年中心の子どもとなると、地図を前にして解説するだけ、というわけにはいかない。そこで写真や絵図といった視覚的な資料をA4サイズに印刷し、それらをカルタのように床にぶちまけ、クイズ形式で地域を知るワークショップをおこなった。

この経験のなかで思い知らされたのは、「簡単なことを難解な言葉で語るのは容易い、難解なことを簡単に説明するのは難しい」という単純明快な原則だ。研究者としての責任は、いうまでもなく後者の資質のなかに求められるものであり、またその経験のなかでこそ、研究は鍛えられるものだ。このなかで子どもたちは、大学の知識を手にする。そのかわりに研究者は子どもたちに鍛えられ、育てられる。寺子屋プロジェクトは、知識を与える側と受け取る側とが、相互に育てられるような教育の可能性を垣間見せるものであった。

(3) 大学のオルタナティブ — 青空大学

さらに寺子屋プロジェクトの重要性として、大学や学校という空間を開くという点が挙げられる。知の生産現場を、大学という閉じられた空間のみに求めるのではなく、大学に生きる人々と大学の外側に生きる人々との交流や緊張関係のなかに求める。その地点からは、新しい知識や大学の在り方が生まれる可能性が開かれるだろう。

そのような理念にもとづいて開催された企画として、大阪市立大学都市研究プラザの協力のもと、ココルームや大阪城公園よろず相談といった団体と協働して2008年6月に開催した、「青空大学 — パペットをつくらう！」がある。G8対抗国際フォーラムの一環として企画されたこのワークショップでは、パペット・マスターとして著名なデイヴィッド・ソルニット氏を招聘し、大阪城公園を舞台としてパペットづくりを行なった。公園を大学のキャンパスにみたくて、工作の授業を行ったのだ。そこには、野宿生活者や支援者、不安定な労働現場そして日々の暮らしにしんどさを抱えた若者など、多様な立場のひとびとが集った。

この企画が「青空大学」と名づけられたのには、いくつかの理由がある。まずそれは、「大学」という言葉の原点に立ち返るものであった。教えたい人がいて、学びたい人がいれば、それがどこであろうと大学と呼んでいいはずだ。もうひとつ、「青空」という言葉には、屋外で営まれる行為という意味あいのほ

かに、「公共的なもの」「開かれたもの」といったニュアンスも含まれてくる。「青空大学」という言葉には、公園なり大学なりを、与えられたままに享受し消費するのではなく、自分たちがのぞむ表現を自身の手で作り返す、というささやかな意思が込められていた。

(4) 歴史のオルタナティブ — ころのたねとして

そして最後に、本書で2冊目となる試み、『ころのたねとして』がある。場所を紡ぎだす力となるものは、市井のひとつのありふれた歩行、発されてはその都度消えていく無数の会話、そのなかで折りたたまれてきた沈黙の生と死である。市井のささいな歴史的記憶は、あまりに日常的であり、寡黙であるがゆえに、いわゆる「正史」にその声が刻み込まれることがない。

「こたね」とは、そのような土地の声に耳を傾け、呼び覚ます試みだ。土地に刻まれたかすかな呼吸に声と意味を与えることが、ひるがえって私たちの生を肯定する力にもなるだろう。本書がそのきっかけになれば、幸いである。

- * 1 上田假奈代「ホームレスと表現。自立・自律の試み — 新世界での試み」現代思想 34-9、2006、P.223
- * 2 上田假奈代「アートから社会へ — アートと社会の関わりの可能性をさぐる」こたね制作委員会『ころのたねとして — 記憶と社会をつなぐアートプロジェクト』、2007、P.25
- * 3 セルトー、ミシェル・ド『日常実践のポイエティック』国文社、1987、P.262
- * 4 セネット、リチャード『無秩序の活用?都市コミュニティの理論』中央公論社、1975、P.115
- * 5 前掲* 4、P.122 ~ 123
- * 6 前掲* 4、P.131
- * 7 上田假奈代「歩きながら考える、新自由主義とアート。釜ヶ崎のちいさな場から」青空大学連絡会編『青空大学報告書(仮)』近刊
- * 8 前掲* 2、P.22
- * 9 ソルニット、レベッカ『暗闇のなかの希望 — 非暴力からはじまる新しい時代』七つ森書館、2005、P.35 ~ 36
- * 10 前掲* 1、P.227

[プロフィールは31ページを参照]

● ● ●

あとがきにかえて、 歩きながら考える

● ● ●

価値とは、すでに固定化された社会関係の（公共による）認知ではなく、人びとがそれによって「まったく新しい社会関係を構築することさえ含めて」ほとんど何でもなしうる可能性を孕んだ事象である。

（「アナーキスト人類学のための断章」デヴィッド・グレーバー著 高祖岩三郎訳 以文社刊 2006年）

釜ヶ崎で活動をはじめて一年が過ぎた。動物園前一番街のなかの「インフォショップ・カフェ ココルーム」は、スナックを改装したちいさなカフェの空間だが、客席のなかに事務機能をおく。飲食店特有のお金を持っていれば誰でも入れるオープンさと、NPOの事務所であることからお金がなくても立ち寄れるパブリックさがないまぜになり、さまざまな立場や状況の人が訪れ、語らい、夜遅くまで明かりが灯っている。四畳半の畳敷きはライブの舞台になり、ワークショップが行われ、昼寝のスペースにもなる。ちゃぶ台では食事や打ち合わせが行われ、手芸部の作業場にもなる。お客さんがキッチンに入って手伝ってくれたり、お客さんとスタッフがともに生活相談や就労相談をうけて解決をはかろうと動くこともある。夜回りを呼びかけて集まり食べ物をつくり近所の野宿者にくばる。子どもの施設にワークショップに出かけたり、お客さんを釜ヶ崎のボランティア活動や勉強会に誘ったり、外国人に道案内をしたり、アーティストやジャーナリスト、関心のある人に釜ヶ崎を案内するなど、拠点としても機能している。釜ヶ崎という特殊な地域で民間のコミュニティカフェとして模索しながら活動している。

面する商店街の人通りはそれほど少ないわけではないが、昭和のまちなみに昭和な顔の人たちが歩いていて、やはり独特の雰囲気である。このまちは、とくに関西圏の人びとにとって「危険だから行ってはいけないところ」とされている釜ヶ崎である。透明な壁に囲まれたようなこの地域をあえて選び、アートNPOとして活動をはじめたのは、新自由主義が席卷する日本で「新しい社会関係」を構築したいと願ったからであり、またその可能性を事象化することでアートの領域を広げ、わたしたちの仕事を果たしたいと考えたからだ。

海外の事例をときおり耳にする。排除された人たちの暮らす地域で廃工場や空き家がコミュニティアートの拠点となり、社会との結び目となって、人々をエンパワメントし仕事をつくりだし、まちを変えていく。人が持つ創造性と自治体との協働の仕組みが功を奏している好事例がある。コミュニティが崩壊し、コミュニティアートという言葉がやっと聞かれるようになったばかりの日本でどんな取り組みができるだろうか。

実際のところ現場に身をおくと、日常茶飯な出来事に翻弄されてしまう。なにがアートなのか、アートかどうかを考えるよりもさきに行動を起こしてしまうし、感情が揺れる。警察を呼ぶような騒ぎが起る。罵声、なだめる声、もみあう音、破壊音。結局110番をして警察官に取り調べられ、血を拭き、飛び散っ

た破片を片付けながらため息がでる。暴力沙汰ばかりではない。生活に困窮した人たち、不安定な状態の人たちを目の前にして、何かできることをと思い奔走する。あるいは何もできず扉を閉めることもある。状況が改善されれば嬉しいが、改善されない場合のほうが多い。さらに依存されつづけるわけにもいかず、どのように関係し事態を展開していくのかを問われる。スタッフ個人のモチベーションや経験に過度に依存したかたちでの働き方は組織として危うさもある。また目の前の差し迫った問題に時間をとられ、わたしたちにはアドボカシー(政策提言)を行うようなデータの収集や論説の構築、政治的な動きができていない。アートNPOのなかでも地域に根ざし分野横断的な取り組みをしている団体は増えてはきているが、釜ヶ崎のような社会問題が集積した地域での活動は珍しく、ネットワーク化もはかれていないのが現状である。現在この原稿をイギリスに向かう飛行機のなかで書いている。急遽招聘が決まり、日本のコミュニティアートの現場に携わる人など7人とともに現場視察、アドボカシー、自治体や大学との協働の仕組みを学ぶためにブリティッシュカウンシルから一週間の視察ツアーが組まれた。こういった機会が作られること自体が数年前からすれば大きな変化であり、今後の展開はそれぞれの地域での真摯な取り組みとグローバルなネットワークから生まれると予感する。

本プロジェクトはさまざまな人たちとのつながりを大切に、聴くことからはじめ、それらを表現していくことによって「こころのたね」をつないでいく。それがわたしたちのミッションであり、ぶれないための方策でもある。大人や高齢者だけではなく、こどもの人たちにも耳を傾ける。「あしたの地図よ」はこども対象のワークショップである。過去、現在、未来の記憶を創造していく。今回はわたしたちが拠点をおくことになった釜ヶ崎という地域で実施した。わたしたちの日常はコクルームという拠点(わたしたちにとっては仕事場)で釜ヶ崎の住人や訪れる人たちのおしゃべりの積み重ねで彩られており、本書に掲載しきれないほどの「こころのたね」が受け渡しされている。これらの取り組みが「新しい社会関係」をむすぶための経験となることを信じている。

本事業と本書を作成するにあたり、コミュニティハウジング財団と大阪市立大学 都市研究プラザのご協力があったことを申し添え、編集の労をとってくれた岩淵拓郎氏、本プロジェクトに関わってくれた聴き取られた方、聴き取ったアーティスト、研究者、ワークショップ講師、スタッフ、ボランティアスタッフに感謝の意を表す。

2009年3月 上田假奈代

URP GCOE DOCUMENT 6

記憶と地域をつなぐアートプロジェクト

こころのたねとして 釜ヶ崎 2008

2009年3月

企画 上田假奈代 (大阪市立大学都市研究プラザ研究員、NPO法人ココルーム代表)
原口 剛 (大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員/地理学、日本学術振興会特別研究員・神戸大学)
編集 NPO法人ココルーム
岩淵拓郎 (メディアピクニック)
デザイン 佐藤淳デザイン室
発行 大阪市立大学 都市研究プラザ
助成 ハウジングアンドコミュニティ財団

特定非営利活動法人 こえとことばとこころの部屋 (ココルーム)

557-0001

大阪市西成区山王1-15-11

電話 06-6636-1612

<http://www.kanayo-net.com/cocoroom/>

大阪市立大学 都市研究プラザ

558-8585

大阪市住吉区杉本3-3-138

電話 06-6605-2071

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/>

URP GCOE DOCUMENT 6

Arts Projects for Connecting Memory and Locality/Place

“COCORO-NO-TANE” Kamagasaki 2008

Published in March, 2009

Planned by Kanayo Ueda (Researcher of Urban Research Plaza, Osaka City University & Director of NPO COCOROOM), Takeshi Haraguchi (Researcher of Urban Research Plaza, Osaka City University & Researcher of Japan Society for the Promotion of Science (JSPS))

Edited by NPO COCOROOM & Takuro Iwabuchi (media picnic)

Designed by Jun Sato Design

Published by Urban Research Plaza, Osaka City University

Supported by Housing and Community Foundation

NPO COCOROOM

1-15-11 Sannoh Nishinari-ku, Osaka,

557-0001 JAPAN

Tel: +81-6-6636-1612

<http://www.kanayo-net.com/cocoroom/>

Urban Research Plaza, Osaka City University

3-3-138 Sugimoto, Sumiyoshi-ku, Osaka,

558-8585 JAPAN

Tel: +81-6-6605-2071

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/>

© 2009 Urban Research Plaza, Osaka City University

ISBN 978-4-904010-07-5

Printed in Japan

用紙

本文：ニューエイジ 62.5kg 見返し：ニューエイジ 62.5kg 表紙：ジェントルフェイス菊判149.5kg

